

戎町遺跡  
第72次発掘調査報告書

2021  
神戸市



## 序

戎町遺跡は、神戸市須磨区を流れる妙法寺川の東岸に所在する、弥生時代～中世の複合遺跡です。

今回、共同住宅建設に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の成果について報告書を刊行することになりました。

この調査では、弥生時代の集落跡が確認されました。また、炭化米や鹿角などの有機物が残存するなど、豊富な種類の考古資料を得ることができました。これは、本遺跡において生活を営んだ人々の姿を考えるうえで重要な成果といえます。本報告書が、地域の歴史研究や文化財保護のための資料として、広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書刊行にご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

神戸市

## 例　　言

1. 本書は、令和2年度に神戸市須磨区戎町3丁目7番5・6・12・13で実施した戎町遺跡第72次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、共同住宅建設に伴うもので、神戸市文化スポーツ局文化財課が実施した。現地における調査は文化財課　藤井太郎、小野寺洋介が担当した。
3. 調査現場での遺構の実測および遺構写真の撮影は調査担当者が行った。
4. 出土品整理作業は、令和2年度に神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施し、藤井、小野寺が担当した。
5. 遺物の写真撮影は、西大寺フォトの杉本和樹氏に委託して実施した。
6. 本書の執筆は、藤井、小野寺が執筆し、編集は小野寺が行った。ただし、「第4章第1節 放射性炭素年代測定」については、株式会社パレオ・ラボに委託した。また、「第4章第2節 戎町遺跡第72次調査の動物遺存体」については、東海大学 丸山真史氏より玉稿を賜った。
7. 本書に用いた座標は平面直角座標系第V系（世界測地系）、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示している。また、方位は座標北を指す。
8. 調査位置図は、国土地理院発行の25,000分の1「神戸首部」「神戸南部」、および神戸市発行2,500分の1地形図「東須磨」「禅昌寺」を使用した。
9. 本書で用いる土色は、小山正忠・竹原秀雄編の『新版 標準土色帖』（15版、1995年刊行）に準じる。
10. 土器の実測図は、断面が白抜きのものが縄文土器・弥生土器・土師器、黒塗りのものが須恵器を示す。
11. 発掘調査で出土した遺物ならびに図面・写真等の記録類は、神戸市埋蔵文化財センターにて保管している。

# 目 次

序文

例言

目次

挿図・表・写真・写真図版目次

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 第1章 はじめに                   | 1  |
| 第1節 調査に至る経緯と経過             | 1  |
| 1. 調査に至る経緯                 | 1  |
| 2. 調査体制                    | 1  |
| 3. 調査の経過                   | 1  |
| 第2節 戎町遺跡の地理的環境と歴史的環境       | 2  |
| 1. 地理的環境                   | 2  |
| 2. 歴史的環境                   | 2  |
| 3. 既往の調査成果                 | 6  |
| 第2章 発掘調査の成果                | 9  |
| 第1節 調査区の設定                 | 9  |
| 第2節 基本層序                   | 9  |
| 第3節 第1遺構面 庄内式期             | 12 |
| 第4節 第2遺構面 弥生時代中期～庄内式期      | 15 |
| 第5節 第3遺構面 弥生時代中期           | 32 |
| 第6節 第4遺構面 弥生時代中期初頭以前       | 34 |
| 1. 7区南トレンド                 | 34 |
| 2. 下層シルト質土層                | 38 |
| 第3章 自然科学的考察                | 43 |
| 第1節 放射性炭素年代測定              | 43 |
| 第2節 戎町遺跡第72次調査の動物遺存体       | 46 |
| 第4章 まとめ                    | 48 |
| 第1節 戎町遺跡第72次調査の成果概要        | 48 |
| 第2節 第4遺構面出土土器の年代的位置付け      | 50 |
| 第3節 戎町遺跡における弥生時代～庄内式期の遺跡変遷 | 52 |

## 挿図・表・写真・写真図版目次

### 図版

|                         |    |                        |    |
|-------------------------|----|------------------------|----|
| 第1図 戎町遺跡の位置図            | 2  | 第18図 SB02出土土器実測図       | 20 |
| 第2図 戎町遺跡の周辺図            | 4  | 第19図 SB02出土敷地査定実測図     | 20 |
| 第3図 既往の調査位置図            | 7  | 第20図 SK03平・断面図         | 21 |
| 第4図 調査区の設定図             | 9  | 第21図 SK04平・断面図         | 21 |
| 第5図 調査区北・東側土層断面図        | 10 | 第22図 SK03・04出土土器実測図    | 22 |
| 第6図 調査区南側土層断面図          | 11 | 第23図 SK02平・断面図         | 22 |
| 第7図 第1遺構面平面図            | 12 | 第24図 SK02出土土器実測図       | 23 |
| 第8図 SP02土器出土状況平・断面図     | 13 | 第25図 SK05平・断面図         | 24 |
| 第9図 SP02出土土器実測図         | 13 | 第26図 SK05出土土器実測図       | 24 |
| 第10図 SR01出土土器実測図        | 13 | 第27図 SK12・18平・断面図      | 25 |
| 第11図 第1遺構面検出遺構出土土器実測図   | 14 | 第28図 SK12出土土器実測図       | 26 |
| 第12図 第2遺構面平面図           | 15 | 第29図 SK20平・断面図         | 27 |
| 第13図 SB01平・断面図          | 17 | 第30図 SK20出土土器実測図       | 27 |
| 第14図 SB01-SK01遺物出土状況平面図 | 17 | 第31図 第2遺構面検出遺構出土土器実測図  | 29 |
| 第15図 SB01出土土器実測図        | 18 | 第32図 第2遺構面出土土器実測図      | 30 |
| 第16図 SB02平・断面図          | 19 | 第33図 SP55・第2遺構面出土土器実測図 | 31 |
| 第17図 SB02-SK01土器出土状況平面図 | 19 | 第34図 第3遺構面平面模式図        | 32 |

# 挿図・表・写真図版目次

## 図版

|                              |    |                        |    |
|------------------------------|----|------------------------|----|
| 第 35 図 6・7区第3遺構面平面図、SX04 断面図 | 33 | 第 43 図 SP105 出土器実測図    | 37 |
| 第 36 図 SP11 土器出土状況平・断面図      | 33 | 第 44 図 7区北トレーナー平・断面図   | 38 |
| 第 37 図 第3遺構面検出構造出土土器実測図      | 33 | 第 45 図 下層シルト質土層出土土器実測図 | 39 |
| 第 38 図 下層レンチ配置図              | 34 | 第 46 図 下層シルト質土層出土遺物実測図 | 40 |
| 第 39 図 7区南トレーナー第4遺構面平面図      | 35 | 第 47 図 層年較正結果          | 44 |
| 第 40 図 7区南トレーナー第4遺構面上土器出土状況図 | 35 | 第 48 図 第 38-11 次調査の岡構築 | 50 |
| 第 41 図 SX08 出土土器実測図          | 36 | 第 49 図 第1次調査出土の土器      | 51 |
| 第 42 図 SP99 出土土器実測図          | 37 | 第 50 図 戸町遺跡の遺構分布状況図    | 53 |

## 表

|                    |    |                           |    |
|--------------------|----|---------------------------|----|
| 第 1 表 既往の調査成果概要一覧表 | 8  | 第 5 表 測定試料および処理           | 43 |
| 第 2 表 遺物観察表(1)     | 41 | 第 6 表 放射性炭素年代測定および層年較正の結果 | 44 |
| 第 3 表 遺物観察表(2)     | 42 | 第 7 表 動物遺存体一覧             | 47 |
| 第 4 表 遺物観察表(3)     | 42 | 第 8 表 戸町遺跡の弥生時代～庄内式期の調査成果 | 49 |

## 写真

|                             |    |                       |    |
|-----------------------------|----|-----------------------|----|
| 写真 1 SX01 磨製石斧出土状況（北東から）    | 14 | 写真 5 SX06 断面（南から）     | 31 |
| 写真 2 SB02 飯納壺・石臼丁出土状況（北西から） | 20 | 写真 6 SP105 半裁状況（東から）  | 37 |
| 写真 3 SK02 土器出土状況            | 23 | 写真 7 6区下層レンチ出土状況（北から） | 40 |
| 写真 4 SB02-SP03 斫ち割り状況（東から）  | 28 | 写真 8 被熱した動物遺存体        | 46 |

## 写真図版

|                                    |  |                          |  |
|------------------------------------|--|--------------------------|--|
| カラー図版1<br>7区 SX08 出土炭化米および周辺の土器    |  | 写真図版 10<br>SB01 出土遺物 (1) |  |
| カラーリンク版2<br>高取山から調査地を望む（北西から）      |  | 写真図版 11<br>SB01 出土遺物 (2) |  |
| 7区 SP99・SX08 土器出土状況（北から）           |  | 写真図版 12<br>SP02 出土遺物     |  |
| 写真図版1<br>1区 第2遺構面全景（北西から）          |  | 写真図版 13<br>SK20 出土遺物     |  |
| 2・4区 第2遺構面全景（北東から）                 |  | 写真図版 14<br>SB04 出土遺物     |  |
| 写真図版2<br>4区 SB01 土器出土状況（南から）       |  | SK02 出土遺物                |  |
| 4区 SB01 底面上土器状況（南から）               |  | 写真図版 15<br>SK12 出土遺物     |  |
| 2区 SP11 土器出土状況（北から）                |  | SK05 出土遺物                |  |
| 写真図版3<br>6区 第1遺構面全景（北から）           |  | 写真図版 16<br>SP73 出土遺物     |  |
| 7区 第1遺構面全景（北西から）                   |  | SP11 出土遺物                |  |
| 写真図版4<br>6区 第2遺構面全景（西から）           |  | SP99 出土遺物                |  |
| 7区 第2遺構面全景（南西から）                   |  | SP105 出土遺物               |  |
| 写真図版5<br>6区 SB02-SK01 土器出土状況（北西から） |  | SX08 出土遺物                |  |
| 7区 SB01 全景（西から）                    |  | 第4遺構面上面出土遺物              |  |
| 3・7区 SB04 全景（南西から）                 |  | 写真図版 17<br>下層シルト質土層出土遺物  |  |
| 写真図版6<br>7区 SK02 全景（北西から）          |  | 写真図版 18<br>調査地出土石器 (1)   |  |
| 7区 SK12・18 全景（北東から）                |  | 写真図版 19<br>調査地出土石器 (2)   |  |
| 写真図版7<br>6区 SK05 全景（北東から）          |  | 調査地出土土製品                 |  |
| 3区 第2遺構面全景（南東から）                   |  |                          |  |
| 写真図版8<br>5区 SK20 土器出土状況（北東から）      |  |                          |  |
| 7区 第4遺構面全景（南東から）                   |  |                          |  |
| 写真図版9<br>7区 SX08 土器出土状況（南西から）      |  |                          |  |
| 7区 SX08-2 全景（北西から）                 |  |                          |  |
| 7区 SP105 土器出土状況（南西から）              |  |                          |  |

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯と経過

### 1. 調査に至る経緯

戎町遺跡第72次調査は、神戸市須磨区戎町3丁目7番5・6・12・13において令和2年度に実施したもので、共同住宅建設工事を契機とする。試掘調査の結果、埋蔵文化財の存在が確認され、工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲212m<sup>2</sup>について、令和2年5月25日から8月14日まで発掘調査を実施した。また、同年度において遺物整理作業と発掘調査報告書の作成を行った。

### 2. 調査体制

令和2年度（現地調査、遺物整理・報告書作成）

神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館名誉館長

菱田 哲郎 京都府立大学文学部教授

神戸市文化スポーツ局文化財課

局長 岡田 健二 副局長 宮道 成彦

文化財課長 安田 澄 埋蔵文化財センター担当課長 前田 佳久

埋蔵文化財係長 東 喜代秀 文化財課担当係長 斎木 巍

文化財課担当係長 松林 宏典 同 中村 大介

事務担当学芸員 繁瀬 文佳

遺物整理担当学芸員・保存科学担当学芸員 山田 衍生

調査および報告書作成担当学芸員 藤井 太郎・小野寺洋介

### 3. 調査の経過

令和2年5月25日より、発掘調査を開始した。同日に4区（調査区については第2章第1節参照）の重機掘削を行い、5月26日に1区と2区の重機掘削を行った。5月29日に1区・2区・4区の第1遺構面の記録作業を行い、6月1日より第2遺物包含層を掘削した。6月3日に1区の下層確認と記録作業を行い、6月4日に同区の埋め戻しを完了した。6月8日と9日に6区の重機掘削を行い、第1遺物包含層を検出した。6月10日に2区の下層確認と記録作業を行い、完了後埋め戻しを行った。6月17日に4区の下層確認と記録作業を行い、完了後埋め戻しを行った。6月23日に6区の第2遺物包含層を掘削した。7月2日に6区南西側で下層確認を行った。7月8日に6区東側の下層確認中に第3遺構面を確認し、遺構掘削と記録作業を行った。7月9日と10日に6区の埋め戻し作業と7区の重機掘削を行った。7月15日に7区の第2遺物包含層を掘削した。7月28日に7区南東側（南トレンド）で下層確認を行い、第4遺構面を検出した。7月30日に3区と5区の重機掘削を行い、第1遺物包含層を検出した。7月31日に3区と5区の第2遺物包含層を掘削した。8月7日に7区の南トレンドの記録作業の完了後、埋め戻しを行った。8月11日と12日に3・5区・7区で下層確認を行った。8月13日に埋め戻し作業を行い、8月14日に現地調査を完了した。

## 第2節 戎町遺跡の地理的環境と歴史的環境

### 1. 地理的環境

戎町遺跡は、神戸市南西部の須磨区に位置し、妙法寺川が形成した扇状地末端ないしは自然堤防上に立地する遺跡である。遺跡の範囲は、須磨区戎町、大池町、大田町、大黒町、寺田町、飛松町、平田町にまたがる東西約500m、南北約800mに及び、同区内においても屈指の広さをもつ遺跡といえる。本遺跡内には神戸市営地下鉄山手線および山陽電鉄の板宿駅があり、その周囲に商業施設や住宅地が広がる。

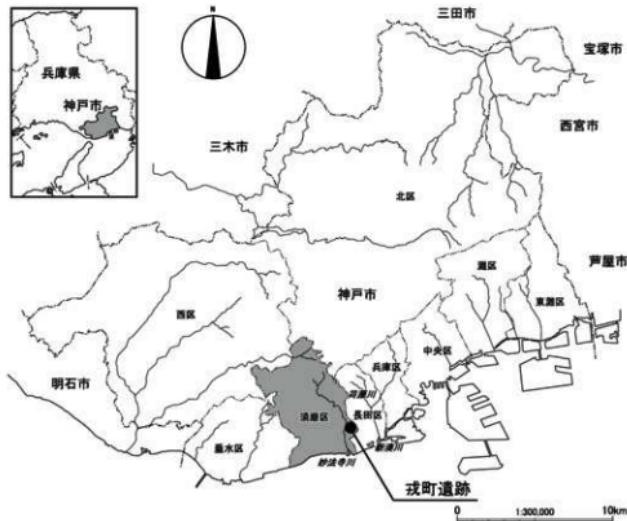
遺跡は、現在の海岸線より約1.5kmまでの距離の位置に所在する。しかし、縄文時代の最高海面期には、須磨区から兵庫区にかけて大型の砂嘴が発達し、戎町遺跡周辺は内湾地帯であったことが判明している。その後、弥生時代の海退によって表出し、妙法寺川による堆積作用によって、今までの地盤が形成されたものと考えられる。

### 2. 歴史的環境

妙法寺川および東側に流れる旧茹藪川（現在の新湊川）流域では、数多くの遺跡が知られる。以下に、代表的なものを記す。

**旧石器時代** 当時期の遺跡は少なく、会下山遺跡でナイフ形石器が採集されたことが知られる程度である。

**縄文時代** 妙法寺川流域では大手町遺跡と天神町遺跡で早期、旧茹藪川流域では五番町遺跡で後期の土器が確認される。晩期には遺跡数が増え、戎町、二葉町、若松町東、大橋町東、大橋町、松野、水笠、長田南、長田神社境内、五番町、上沢の各遺跡でその痕跡を残す。



第1図 戎町遺跡の位置

**弥生時代** 前期後半～後期まで遺跡が継続する戎町遺跡は、妙法寺川流域における拠点的集落と考えられる。前期の遺跡として、大田町、若松町東、松野、神楽、上沢の各遺跡が知られる。中期では、中期前葉から後期まで継続して集落を営む千歳遺跡、戎町遺跡の北西側に立地する大手町遺跡が知られる。また、中期中葉では旧茹藻川流域でいくつかの遺跡が知られる。後期に至ると妙法寺川～旧茹藻川流域における遺跡数は増加し、大田町、大橋町東、若松町、松野、神楽、長田神社境内、五番町、上沢などの遺跡がある。後期に続く庄内式期には後期から継続して営む遺跡が多く、戎町、御藏、上沢遺跡などで堅穴建物が確認された。妙法寺川流域より旧茹藻川流域において遺跡が多く営まれた。三番町と御藏遺跡ではこの時期の水田が発見されている。

**古墳時代** 大型の古墳として、会下山二本松古墳、得能山古墳、念仏山古墳が知られる。会下山二本松古墳と得能山古墳では、埋葬施設から青銅鏡や鉄製品の出土が報告される。後期には大手古墳群が築かれ、横穴式石室の存在が知られる。集落遺跡としては、鷹取町、古川町、大手町、松野、神楽、御船、長田神社境内、上沢、五番町などの遺跡がある。中期後葉の松野遺跡における大型掘立柱建物や、神楽、上沢遺跡で出土した韓式系土器は特筆される。この他、詳細な時期は不明であるが古川町遺跡では大壁建物と推測される建物が検出されている。また、古墳時代後期に須恵器生産を行った林山窯跡が高取山の東麓に築かれる。

**奈良・平安時代** 古代山陽道の整備や寺院建立に伴うと考えられる遺跡が営まれるようになる。代表的なものとして、須磨駅家と推測される大田町遺跡などが知られる。大田町遺跡では、掘立柱建物や円面硯、瓦、和同開珎などが発見されている。行幸町遺跡では木簡や須恵器が遺棄された大構を検出し、古川町遺跡でも集落が営まれたようである。室内遺跡では礎石、瓦、塑像の台座などの存在から伝房王寺との関わりが指摘される。上沢遺跡でも完形の銅鏡や帶金具が出土している。このほか、御藏、神楽遺跡が推定山陽道に接すると考えられる。

**中世～近世** 平安時代以降には、戎町、二葉町、大橋町、古川町の各遺跡が営まれるが、いずれも一般的な農村集落といった趣が強い。また、現在までに痕跡は確認されていないが、大手町遺跡の北西側に、南北朝時代の城郭である松岡城があったと伝わる。大手町遺跡では、近世の庄屋敷に伴う庭園関連遺構が確認され、当時における庄屋の生活ぶりが推測できる資料を得ている。

#### 各遺跡参考文献

- 天神町遺跡 松林宏典 2000「須磨天神町遺跡 第1次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会、松林宏典 2001「須磨天神町遺跡 第2次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会  
行幸町遺跡 西岡巧二、石島三和、阿部 功 2003「行幸町遺跡 第1次～1・2調査』『平成12年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会  
大手町遺跡 中谷 正、山本雅和編 2003「大手町遺跡 第1～4・6次発掘調査報告書』神戸市教育委員会  
大手古墳群 喜谷美宜 1989「古墳時代 群集墳の時代」『新修神戸市史 歴史編』1 神戸市  
得能山古墳 喜谷美宜 1989「古墳時代 前方後円墳の成立と発展」『新修神戸市史 歴史編』1 神戸市  
大田町遺跡 森内秀造、山上雅弘、森本貴子 1993「大田町遺跡」兵庫県教育委員会、吉川義彦 1994「大田町遺跡発掘調査報告書」大田町遺跡 調査団  
鷹取町遺跡 大平 浩編 1991『鷹取町遺跡』兵庫県教育委員会  
古川町遺跡 山口英正編 2014『古川町遺跡 第2次発掘調査報告書』神戸市教育委員会  
若松町遺跡 山田清潮、高木芳安 2000「若松町遺跡」神戸市教育委員会  
千歳遺跡 西岡巧次 2014「千歳遺跡 第5次調査」『平成23年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会  
松野遺跡 口野博史編 2001『松野遺跡発掘調査報告書』第3～7次調査 神戸市教育委員会、岡野 豊編 2002『松野遺跡 第11次～23・25・26・



- |              |           |            |            |              |           |
|--------------|-----------|------------|------------|--------------|-----------|
| 1. 戎町遺跡      | 2. 天神町遺跡  | 3. 行幸町遺跡   | 4. 大手町遺跡   | 5. 大手古墳群     | 6. 得能山古墳  |
| 7. 大田町遺跡     | 8. 鹿取町遺跡  | 9. 古川町遺跡   | 10. 若松町遺跡  | 11. 千歳遺跡     | 12. 松野遺跡  |
| 13. 二葉町遺跡    | 14. 大橋町遺跡 | 15. 若松町東遺跡 | 16. 大橋町東遺跡 | 17. 水笠遺跡     | 18. 神楽遺跡  |
| 19. 御船遺跡     | 20. 念仏山古墳 | 21. 御藏遺跡   | 22. 長田南遺跡  | 23. 五番町遺跡    | 24. 三番町遺跡 |
| 25. 長田神社境内遺跡 | 26. 林山窯跡  | 27. 室内遺跡   | 28. 上沢遺跡   | 29. 会下山二本松古墳 | 30. 会下山遺跡 |

第2図 戻町遺跡の周辺図

- 29～31次、水笠遺跡 第2・3・5・15・17～23次発掘調査報告書』神戸市教育委員会、内藤俊哉 2010『松野遺跡 第42・1・2次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 二葉町遺跡 川上厚志編 2001『二葉町遺跡発掘調査報告書』第3・5・7・8・9・10次調査』神戸市教育委員会、池田 純編 2010『二葉町遺跡 第22次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 大橋町遺跡 中谷 正 2006『大橋町遺跡 第1次～1～6次発掘調査報告書』神戸市教育委員会、阿部敬生、藤井太郎編 2007『大橋町遺跡 第2次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 若松町東遺跡 西岡巧次・須藤 宏・斎木 嶩・中谷 正・藤井太郎編 2013『若松町東遺跡 第1・2・3・4・5・6次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 大橋町東遺跡 黒田恭正編 2015『大橋町東遺跡 第1次～第6次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 水笠遺跡 丹野 昌編 2009『水笠遺跡 第11次～23・25・26・29～31次、水笠遺跡 第2・3・5～15・17～23次発掘調査報告書』神戸市教育委員会、藤井太郎編 2009『水笠遺跡 第26・27・28・29・30次発掘調査報告書』神戸市教育委員会・(財)神戸市体育協会
- 神楽遺跡 萩本宏明 1981『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 御船遺跡 藤田 拳・長瀬誠司・上田健太郎 2005『御船遺跡』兵庫県教育委員会・長瀬誠司・藤田 拳・上田健太郎 2005『御船遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会
- 念仏山古墳 萩谷美宜 1989『市街地に消えた古墳—念仏山古墳—』『神戸市立博物館研究紀要』第6号・神戸市立博物館
- 御藏遺跡 山田清順・高木芳史ほか 2000『御藏遺跡 第8・9・10次調査』神戸市教育委員会・安田 雄介編 2001『御藏遺跡 第4・6・14・32次調査報告書』神戸市教育委員会・安田 雄介 2001『御藏遺跡 第17・38次調査報告書』神戸市教育委員会・富山直人・池田 純・川上厚志・阿部 功編 2003『御藏遺跡 第5・7～13・18～22・24・28・29・31・33～36・39・41・43次発掘調査報告書』谷 正俊編 2003『御藏遺跡 V』第26・37・45・51次調査』神戸市教育委員会
- 長田南遺跡 地元 築 2001『長田南遺跡 第1次調査』平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 五番町遺跡 石島三和 2008『五番町遺跡 第12次調査』神戸市教育委員会
- 三番町遺跡 山仲 遼編 2000『神戸市長田区三番町遺跡 第1次調査』妙見山麓遺跡調査会
- 長田神社境内遺跡 黒田恭正編 1990『長田神社境内遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会、阿部 功 2008『長田神社境内遺跡 第17次発掘報告書』神戸市教育委員会
- 林山窓跡 稲沢正行・渡辺伸行 1986『神戸市長田区林山窓について』『神戸古代史』第3巻2号・神戸古代史研究会
- 室内遺跡 水口富夫・平田博幸・高瀬一嘉 1998『室内遺跡』『兵庫県埋蔵文化財年報』平成9年度・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 上沢遺跡 阿部敬生 1995『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会・石島三和 2000『上沢遺跡発掘調査報告書—第35次調査—』神戸市教育委員会・谷 正俊・富山直人 2004『上沢遺跡Ⅲ 第38・46・50次調査』都市計画道路松木線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・神戸市教育委員会・小林さやか・中村大介 2009『上沢遺跡 第55次調査 発掘調査報告書』神戸市教育委員会・佐伯二郎・山口英正・小野寺洋介編 2019『上沢遺跡発掘調査報告書V』神戸市教育委員会
- 金下山二本松古墳 吉田太郎ほか 1928『金下山二本松古墳及び経塚』『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5編・黒田恭正 1987『金下山二本松古墳』『神戸市埋蔵文化財年報』昭和59年度・神戸市教育委員会
- 金下山遺跡 新修神戸市史編集委員会 1989『新修神戸市史 歴史編I』神戸市教育委員会
- この他、各年度の『神戸市埋蔵文化財年報』を参照

### 3. 既往の調査

戎町遺跡は、昭和 62 年（1989）にビル建設に伴う調査によって、その存在が周知された。これまでに、71 回の発掘調査が行われ、弥生時代～中世の複合遺跡であることが判明している。ただし、遺跡範囲の大きさに比して調査された面積は少なく、その全容の解明には遠いといえる。しかし、遺跡の南東側では集中して調査が行われており、徐々にではあるが、遺跡の内容が明らかになりつつある。以下では、これまでの調査成果について概要を記す。なお、それぞれの調査地点については第3図、主な調査成果については第1表を参照されたい。

**縄文時代** 本遺跡は、弥生時代以降の遺跡として周知されるが、いくつかの調査地点で縄文時代晩期の突帯文土器の出土が確認されている。第6次・第14次調査では、この時期の流路が確認されるものの、明確な遺構は未発見である。

**弥生時代** 本遺跡で最も濃密に遺構が確認されるのは弥生時代である。時期は、前期後半から後期まで至り、とくに中期において顕著である。

前期後半から中期初頭のものとして特筆されるのは、第1次調査の調査成果である。第1次調査の第3遺構面で確認された流路から、大量の土器が出土している。これらは、六甲山系南麓地域における当時の土器様式を考えるうえで基準となる一群として評価される。また、同一遺構面では未成品を含む木製広鉗、偏物状木製品、磨製石斧、石包丁などが出土している。特徴的な遺構としては、円形杭列遺構があり、第4次調査でも同様の遺構が確認されている。第1次調査の第4遺構面では、水田を検出した。この水田に伴う土器が存在しないため、明確な時期は不明であるが、前期前半に営まれた可能性も指摘される。第15・19次調査では、堅穴建物や木棺墓を検出した。第15次調査検出の ST802 では、骨は残存していないものの、白色に変色した土壤から屈葬の状態で埋葬された人骨の様子が復元された。この他、前期の土坑やピット、溝ないし流路が遺跡中央～北側で検出されている。

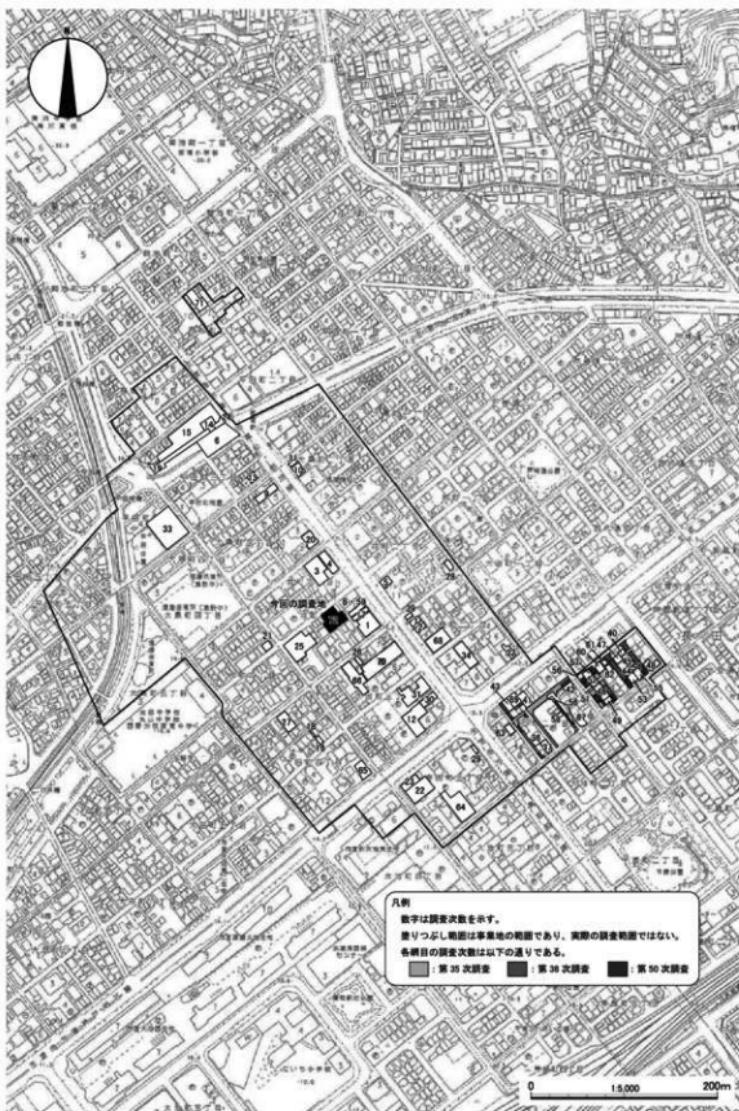
中期では、堅穴建物（堅穴建物状遺構も含む）22 棟や掘立柱建物6棟のほか多数の遺構が確認され、遺跡南東側では周溝墓群を検出した。遺跡南～南東で実施された調査は、いずれも狭小な範囲であったため判然としない部分があるものの、周溝墓は少なくとも 12 基は存在したようである。周溝に伴って破碎された土器が複数みつかっており、これらは周溝墓における儀礼で用いられたものと考えられる。このほか、第28次調査ではこの時期の水田が検出された。

後期になると中期とは異なり、遺構の密度が薄くなり、建物類は確認されていない。このため、一時的に本遺跡における人口の低下とみることができる。

続く庄内式期には弥生時代後期に比して遺構数が増加し、堅穴建物9棟、掘立柱建物3棟などが確認された。とくに第22・28次調査で多くの遺構を検出した。

**古墳時代** 第28次調査で前期、第35次調査で中期、第49次調査で後期の堅穴建物を1棟ずつ検出している。3・4・5次調査の比較的まとまった範囲で前期の土坑などが確認されたほか、遺跡全体では溝や流路がみつかっている。遺構数は前期が多く、次いで後期となり、中期はほとんど確認されていない。第15・19次調査では、古墳時代後期～奈良時代のいずれかと考えられる水田を検出した。

**中世** 第10次調査で平安時代の掘立柱建物、第15・19次調査で平安時代後期～鎌倉時代前期の掘立柱建物群、第24次調査で同時期の井戸や呪符木簡、第25次調査では鎌倉時代前期の井戸、第66次調査で室町時代の水溜め遺構などがみつかっている。検出した遺構の性格などから、中世の戎町遺跡は一般的な農村集落として営まれたものと考えられる。



第3図 既往の調査地位置図

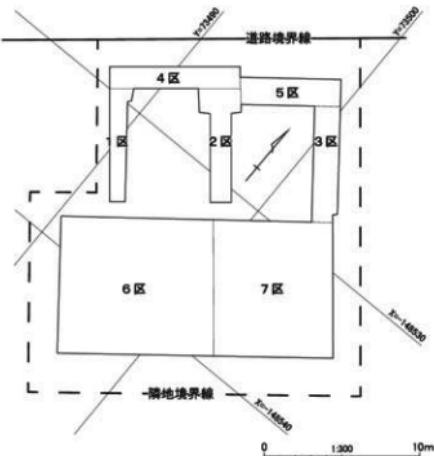


## 第2章 発掘調査の成果

### 第1節 調査区の設定

本調査は、全調査区を7区に分けて調査を行った。それぞれの調査順序については第1章第1節の3の通りである。調査区は、北半側が南側に開いた「ヨ」字形、南半側は長方形を呈する。北半側に1～5区、南半側に6・7区を設定した。各調査区の配置については、第4図の通りである。

なお、遺構番号は、遺構検出順に付しているため、同一面であっても必ずしも連続するとは限らない。



第4図 調査区の設定図

### 第2節 基本層序

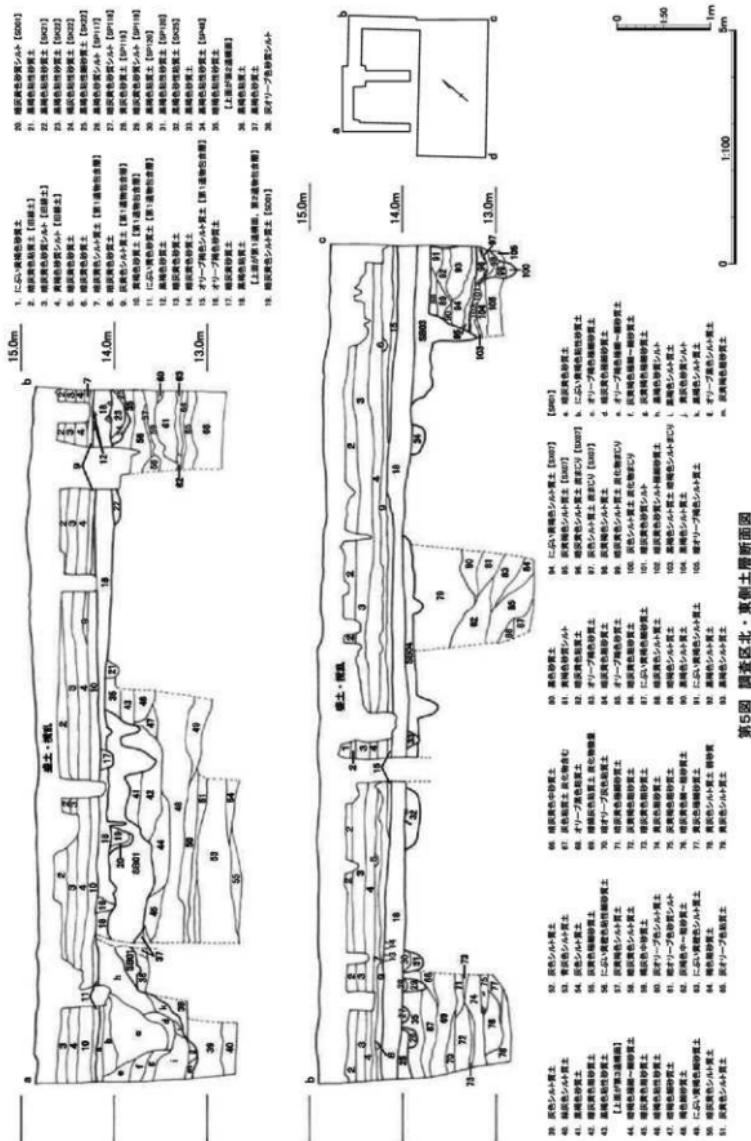
現代の盛土層および戰災時の焼土を含む整地層の下層に、近世および中世の旧耕土層が数層堆積する。その下層に、中世～庄内式期の遺物を含む暗灰黄色・灰黄色・黄褐色・ぶい黄色・オリーブ褐色のシルト質土～砂質土層が存在する。それぞれの土層は薄く、安定的な地盤を形成していないものとみられる。これらを第1遺物包含層とする。

第1遺物包含層下に黒褐色粘質土層が堆積しており、この上面が庄内式期の遺構面である第1遺構面となる。本土層では黄褐色～灰白色の細～中砂程度の砂粒が多くまじる。

黒褐色粘質土層は、庄内式期および弥生時代後～中期の遺物を含む第2遺物包含層であり、この土層を取り除いて、暗褐色～暗オリーブ褐色粘性砂質土層を検出した。本土層上面が、弥生時代中期～庄内式期の遺構面である第2遺構面となる。

暗褐色～暗オリーブ褐色粘質土層より下層は、粘性砂質土～シルト質土層および粗砂質土層が堆積しており、安定的な土層を形成しない。4区では黒褐色粘性砂質土層上面、6・7区では暗オリーブ褐色粘質土中より、黒褐色粘性砂質土が堆積する遺構を確認したため、それぞれの検出面を第3遺構面とした。なお、これら以外の調査区では第3遺構面は確認できなかった。粘性砂質土～シルト質土層以下は、洪水砂層と考えられる極細砂～粗砂質土層が堆積し、さらに下層では湿地状堆積土層である青灰～灰色粘質土～シルト質土層が堆積する。7区の南東側では、黄色砂質シルト層を検出し、この上面で弥生時代前期末～中期初頭の遺構を確認した。このため、本土層上面を第4遺構面とした。

第4遺構面より下層の緑灰～灰オリーブ色粘質土層に至るまでに弥生時代中期～縄文時代晚期の遺物を得た。また、局所的にピット状の遺構を確認した。ただし、安定的な土層はみられなくなるため、これ以下に埋蔵文化財が存在する可能性は低いと考えられる。

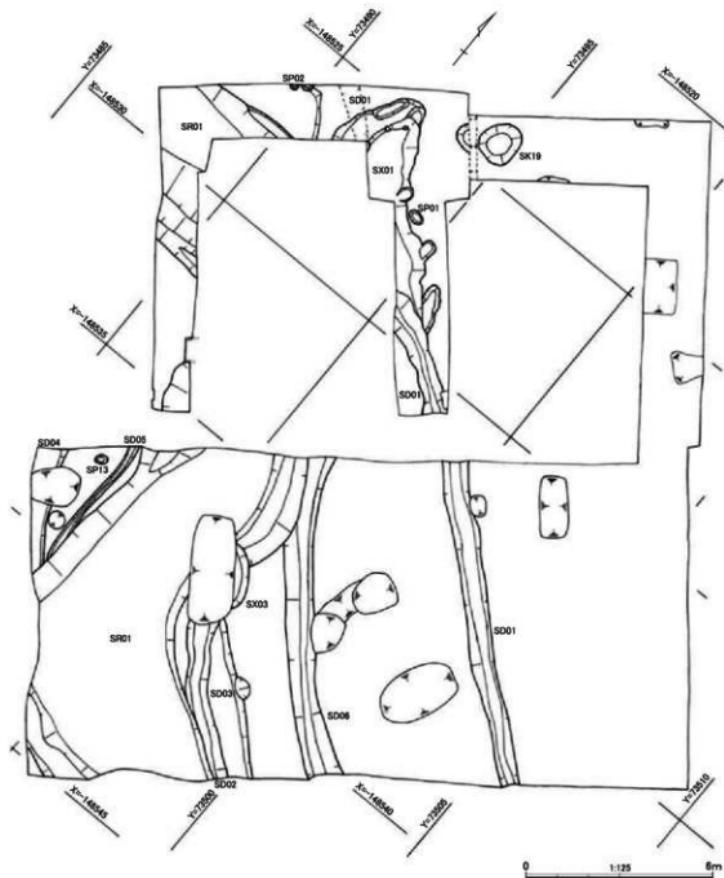


第6図 調査区南側土壌断面図



### 第3節 第1遺構面 庄内式期

中世の遺物を含む暗褐色・灰黄色・黄褐色・にぶい黄色・オリーブ褐色シルト質～砂質土（第1遺物包含層）を掘削し、黒褐色粘質土上面で検出した遺構面である。試掘調査の結果から当初は遺物包含層の上層とされたが、本調査の段階で遺構面であることが判明した。下層の遺構面に比して遺構の密度は低いものの、溝5条、土坑1基、ピット3基、性格不明遺構3基、自然流路1条を検出した。古墳時代後期の遺構も確認したが、遺構面上および遺構内より出土した遺物から主に庄内式期の遺構面と考えられる。



第7図 第1遺構面平面図

SD01 4区・2区・7区を南北方向に縦断する溝である。幅0.7m、深さ0.3mを測る。溝の断面形状は緩いV字形で、溝の西側の傾斜はやや強い。一部で溝の掘削の際に鍬先が入ったとみられる痕跡を確認した。本遺構からは土師器、弥生土器、サヌカイト片が出土した。

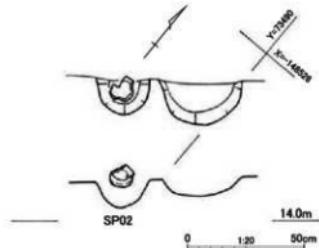
SD03・06 ともに6区中央側から西側で検出した南北方向に流れる溝である。SD03は幅0.9m、深さ0.2m、SD06は幅0.8m、深さ0.3~0.4mを測る。SD06からは古墳時代後期の須恵器が出土しており、遺構の形成時期を示すものと考えられる。

SD01・03・06は、地形の等高線に対して直交方向に掘削されており、区画を目的として設けられた可能性がある。

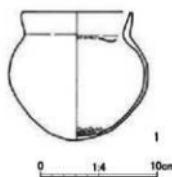
SK19 5区北側で検出した直径1.1m、深さ0.2mを測る土坑である。本遺構からは土師器、サヌカイトが出土した。

SP02 4区北側で検出した直径0.25m、深さ0.1mの円形のビットである。断面は半球状を呈する。

1は、土師器小型丸底壺である。胴部は最大径が肩部側に寄った球形であり、頸部は短く外傾して延びる。胴部最大径が口縁部径よりも大きく、庄内式の後半段階のものと考えられる。



第8図 SP02 土器出土状況平・断面図

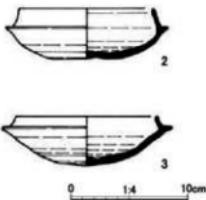


第9図 SP02 出土土器実測図

SR01 2区・4区にかけて検出した性格不明遺構である。調査区外に延びるため、遺構の全容は不明である。最深部で0.15mを測る。本遺構からは、土師器、弥生土器、打製石鏃、磨製石斧が出土した。本遺構の性格は不明であるが、遺構面の年代よりも古い時期の遺物が出土することや、本遺構の西側はSR01の肩部と隣接すると考えられることから、SR01から溢れ出した水流によって遺構面が削られたことできた落ち込みの可能性も考えられる。

SR01 1区西側から6区南側にかけて検出した調査区の北西から南方向へと流れる自然流路である。最大幅は4.8m、最深部で1.1mを測る。6区西側と、1区と2区の中間地点で屈曲すると推測され、調査区内を蛇行して流れれる。

2と3は、須恵器壺身である。2に比して3は立ち上がりが短い。2はTK10型式、3はTK209型式のものと考えられる。このほか、弥生土器、土師器、木質遺物などが出土した。出土した遺物から、本流路は古墳時代後期を上限とするものと考えられる。

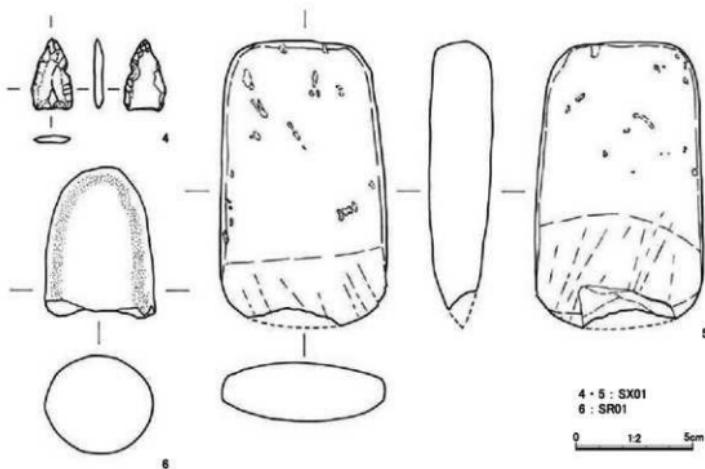


第10図 SR01 出土土器実測図



写真1 SX01 磨製石斧出土状況（北東から）

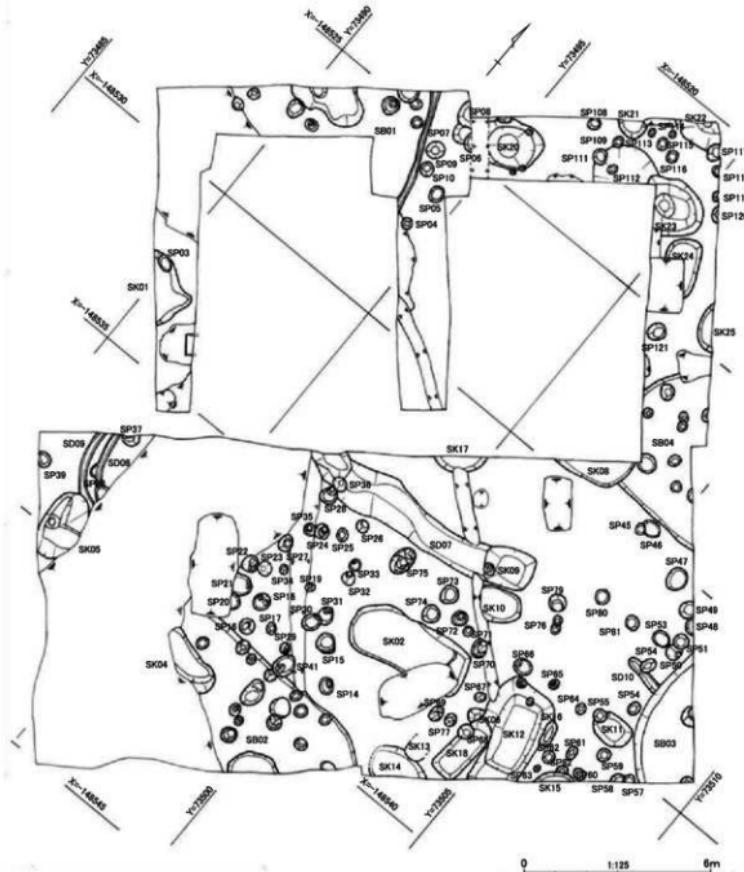
石器 第1遺構面上からはサスカイト片、遺構内からは複数の石器が出土した。4と5はいずれもSX01から出土した。4はサスカイト製の打製石鐵で、平基無茎鐵である。剥片を剥離したのち、両面とも押圧剥離を用いて端部調整を行う。5は輝緑岩製の磨製石斧である。刃部の先端を欠損するものの、全形を復元できる資料である。両面とも刃部にタテ方向の擦痕が残る。全体的にさほど研磨を施しておらず、光沢はありません。6はSR01から出土した輝岩製の石製品である。断面は梢円形を呈する。先端部以外を欠くため全長は不明であるが、石棒の可能性がある。



第11図 第1遺構面検出遺構出土土石器実測図

#### 第4節 第2遺構面 弥生時代中期～庄内式期

庄内式期および弥生時代後期～中期の遺物を含む黒褐色粘質土（第2遺物包含層）を掘削し、暗褐色～暗オリーブ褐色粘質土上面で検出した遺構面である。堅穴建物4棟、溝4条、土坑23基、ピット87基、性格不明遺構3基を検出した。遺構面上および遺構内より出土した遺物から弥生時代中期（第IV様式）～庄内式期の遺構面と考えられる。



第12図 第2遺構面平面図

**SB01** 2区の西側と4区の全域で検出した堅穴建物である。遺構の大部分が調査区外に広がり、西側は後世に形成されたSR01によって削平されたため、規模は不明である。平面形は、周溝の形状から方形と推測される。調査区内では北西—南東で5.7m以上を測る。検出面から床面までの深さは0.15mである。床面から土坑1基(SB01-SK01)、ピット7基(SB01-SP01～SP07)を検出した。ピットは、直径0.35m～0.6m、深さ0.15m～0.4mである。東側の壁際では、幅0.15m、深さ0.1mの周溝を確認した。埋土、床面、土坑内などから出土した土器から庄内式期のものと考えられる。このほか、サヌカイ特製の打製石鏃が出土した。

**SB01-SK01** SB01のほぼ中央で検出した直径1.8m、深さ0.45mの不定形の土坑である。検出位置などから本堅穴建物の中央土坑と考えられる。本土坑上層で、28ℓコンテナ2箱程度の土器がまとまって出土した。出土した土器のうち、上層出土の土器片と、底面上出土の土器片とが接合関係にあるのが複数点確認できたことから、ほぼ一括で廃棄したものと考えられる。

7～22は土師器である。7～9は高壺である。9は外面に丁寧なミガキを施す。10は小型器台である。受部口縁部は面取りを施す。11と12は小型鉢である。11は体部の立ち上がりが急である。13は壺の底部である。内面は板ナデを施すが、底面に工具の角によってついた痕跡がみえる。外面は丁寧なミガキを施す。14～22は甕である。いずれも外面にタタキを施す。14は口唇部に強い面取り、15はやや弱い面取りを施す。16は口唇部を丸くおさめるも直下に弱い稜をもつ。17は口唇部を丸くおさめ厚い頸部をもち、18は厚い頸部が短くのびる。19は口唇部が丸いものの面に弱い稜をもつ。20は口唇部を丸くおさめ薄い頸部をもつ。14～20はいずれもSB01-SK01あるいは上層から出土したが、以上のような口唇部から頸部の形状の違いから、少なくとも7個体の甕が含まれていたと考えられる。21と22は底部である。21はタタキを螺旋状に施す。

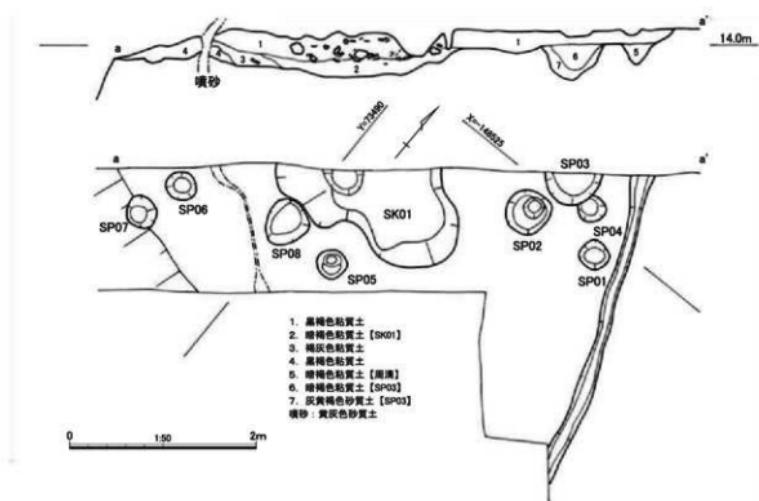
**埴砂** SB01の西側で検出した。埴砂は、北西から南東方向に少なくとも0.7mは吹き上がっていいるようである。第1遺構面上まで吹き上がるものの、中世の遺物を含む第1遺物包含層にまで及んでいないため、中世以前に発生した地震によるものと考えられる。

**SB02** 6区の南側で検出した堅穴建物である。遺構の南半側が調査区外に広がるため、規模は不明であるが、1辺の長さは6.3m以上と考えられる。平面形は隅丸方形と推測される。検出面から床面までの深さは0.2mである。床面で土坑1基(SB02-SK01)、ピット15基(SB02-SP01～15)を検出した。ピットは、直径0.25m～0.6m、深さ0.15m～0.4mである。壁際の周溝は検出できなかった。埋土、床面、土坑内などから出土した土器から弥生時代中期(IV様式後半)のものと考えられる。

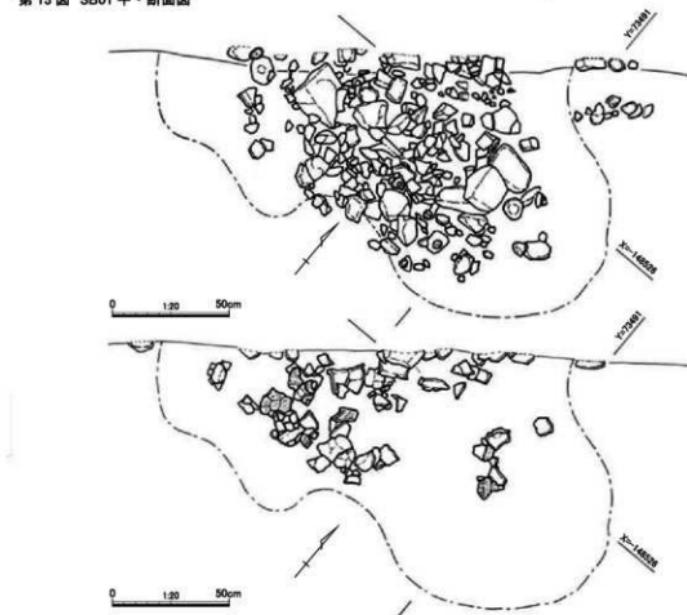
**SB02-SK01** SB02の南側調査区壁際で検出した残存長1.4m、深さ0.15mを測る土坑である。SB02の中央土坑と考えられる。本土坑内では、弥生土器甕(26・27・30)が出土した。

SB02からは弥生土器(23～30)、婧壺(31～33)、打製石鏃(74)、石包丁(81)が出土した。石器については後述する。23は、高壺もしくは器台の脚裾部である。裾部末端に4カ所に直径5mmの穿孔が残る。外側からの穿孔と推測される。24は広口壺である。口縁端部を折り曲げ垂下させる。外面はゆるく面取りを施す。25と26は無頸壺である。25は口縁部外側に突帯を付着させる。26は「く」字形の屈曲した口縁部をもつ。27・28・30は甕である。27は表面は剥離しており調整が不明瞭であるが、器壁が薄いためケズリを施したものと考えられる。28は底部である。内面にコゲが付着する。29は直口壺である。口縁部外面に凹線文を施す。30は「く」字形に屈曲し短くのびる頸部をもつ。口縁部内面に強いナデを施し、器壁は薄く整える。

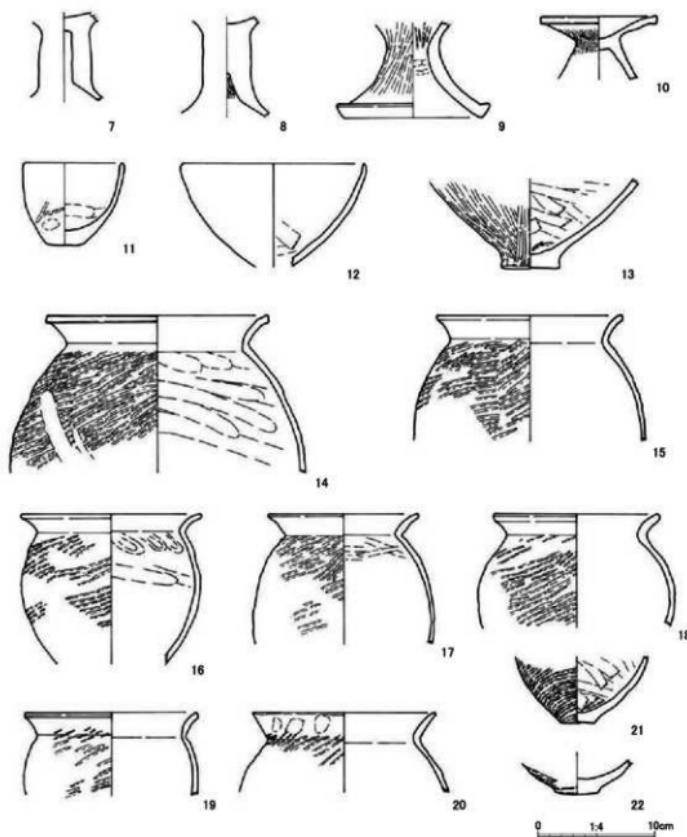
31～33は砲弾型を呈す飯蛸壺である。31と32は欠損のため穿孔部が1カ所のみ残存する。



第13図 SB01 平・断面図



第14図 SB01-SK01 遺物出土状況平面図【上：上層、下：底面上】

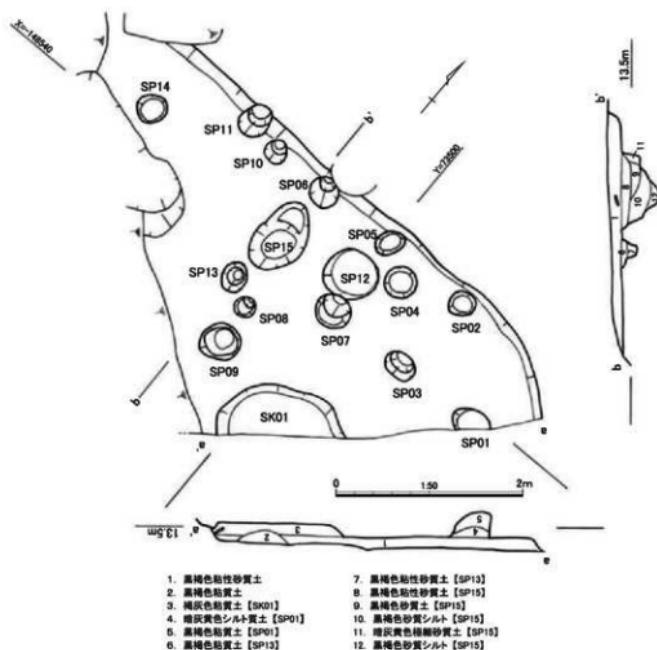


第15図 SB01出土土器実測図

いずれの資料も手づくねとナデ調整を施すが、31と33は内面の底部に工具痕を残す。33は口縁部内面に強いユビナデを施す。

SB03 7区南東部で検出した竪穴建物である。平面円形と考えられるが大部分が調査区外の東側に広がるため全体の規模は不明である。調査区内では南北約3.9mを検出した。検出面から床面までの深さは0.2mである。床面で2基の柱穴を検出した。調査区東壁際で検出したSB03-SP01は直径0.6m、深さ0.5m、南壁際のSB03-SP02は直径0.4m、深さ0.3mである。周壁溝は確認していない。弥生時代中期の土器が出土したが全容のわかる土器は少ない。

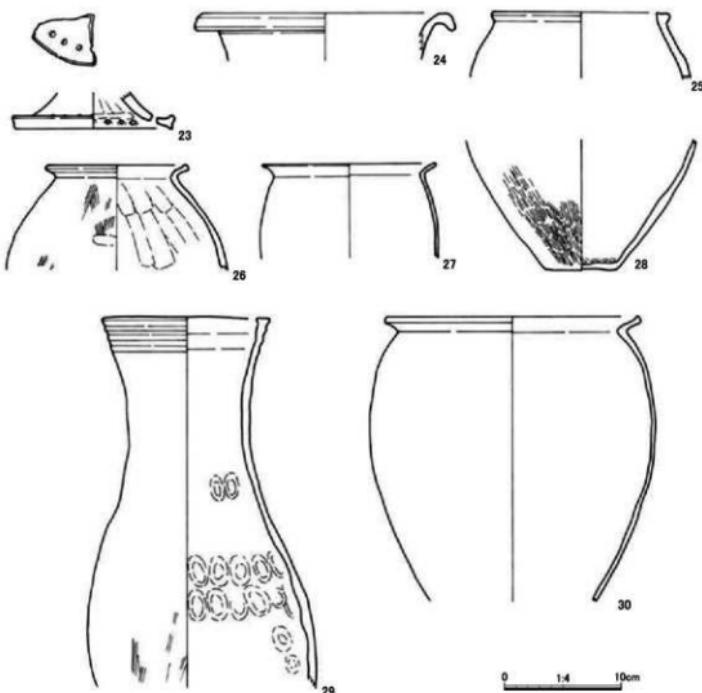
34は弥生土器広口壺である。頭部はやや外傾して立ち上がり、口縁部周辺で外側へ屈曲し、口唇部に面を作る。



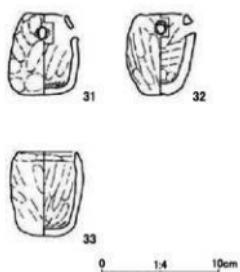
第16図 SB02 平・断面図



第17図 SB02-SK01 土器出土状況平面図



第18図 SB02出土土器実測図



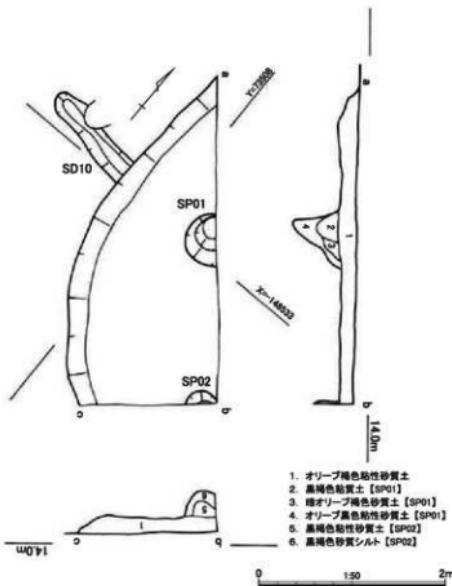
第19図 SB02出土飯納壺実測図



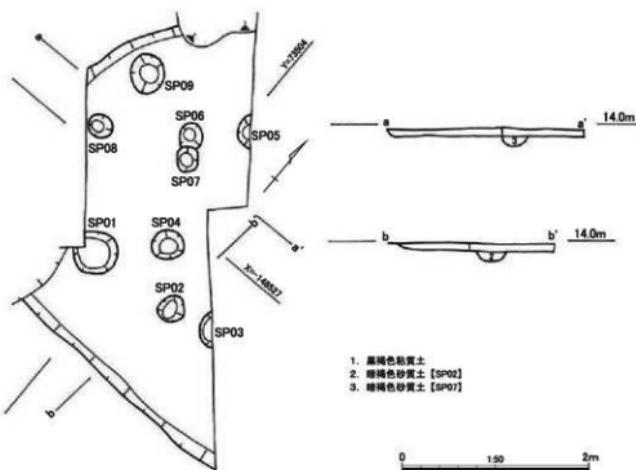
写真2 SB02饭纳壺・石包丁出土状況（北西から）

SB04 3区と7区の境で検出した堅穴建物である。南西隅はSK08により切られる。調査区外東側に広がるため全体の規模、形状は不明である。建物の平面形は7区での検出範囲ではやや直線的に、3区では緩やかに弧を描く。周辺調査で検出されている堅穴建物に平面橢円形のものがあり、これに類する可能性がある。今回の調査では東西約3.9m、南北約3.8mを検出した。検出面からの深さは0.1mである。

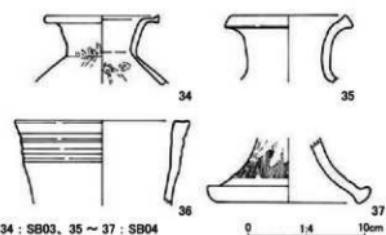
35～37は弥生土器である。35は広口壺である。頸部はやや外傾して立ち上がり、口縁部周辺で短く屈曲する。36は直口壺である。口縁部外面に回線文を施す。37は壺類の脚部と考えられる。外面にハケのちユビナデを施す。器壁の厚味から壺類の脚部と推測している。これらは弥生時代中期（第IV様式）のものと考えられる。



第20図 SB03 平・断面図



第21図 SB04 平・断面図

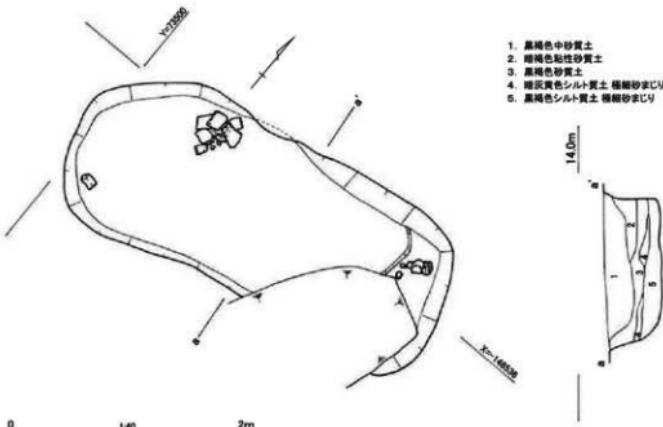


第22図 SB03・04出土土器実測図

出土はない。その上には砂質土が堆積し、弥生土器や大型の砾石などが出土した。土坑の東西両端でまとまって弥生土器の壺などが出土した。西側では壺の底部を上方に向かって割った状況を確認した。また、割る際に用いたと考えられる砂岩の平石が共伴している。破碎された壺の下から土器などの出土はなかった。

38～42は弥生土器である。38は広口壺の口縁部である。口唇部は短く垂下し、下部に刻目を施す。口縁部外側に5条以上の櫛描波状文を施す。39は広口壺と考えられる胴部片である。上部から櫛描文を4単位施し、間に櫛描波状文を加える。また、下部に櫛描列点文を施す。40は壺である。胴部は球状を呈し、口縁部が屈曲したち短く伸びる。41は壺の底部である。39と41はSK02の東側でまとめて出土した。42は壺の底部である。内面に板ナデ、外面にハケとミガキを丁寧に施す。同遺構内では、42と同一個体と考えられる破片は出土しなかった。

SK04 6区中央で検出した楕円形の土坑である。SB02を切り込むが、SR01に切られるため、規模は不明である。残存長で1.9m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。土坑内から弥生土器壺、高杯、甕が出土した。弥生時代中期(IV様式)の土坑と考えられる。



第23図 SK02 平・断面図

SD10 SB03の西辺中央付近に位置する。当初SB03からの排水溝の可能性を想定したが判然としなかった。幅0.3m、検出長1.1m、深さ0.1mである。

SK02 6区・7区で検出した。南側を後世の搅乱により失うが東西3.5m、南北1.5m、深さ0.5mの平面長方形を呈する大型の土坑である。底面から厚さ0.1mにシルト質の砂が堆積し、早く埋没した部分と考えられ、遺物の

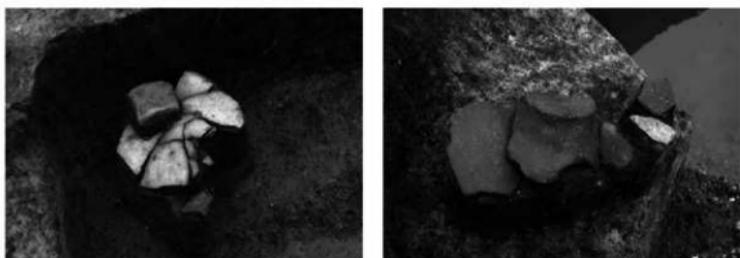
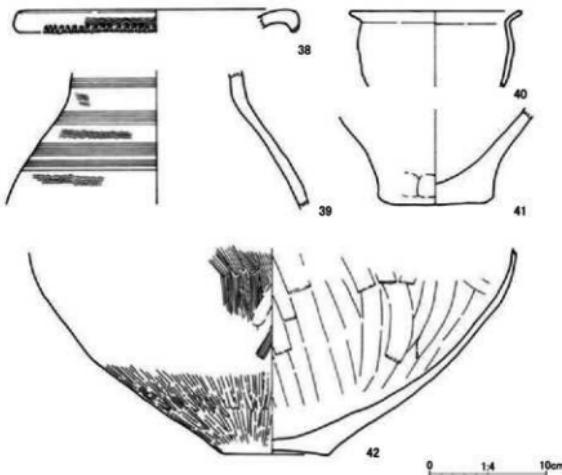


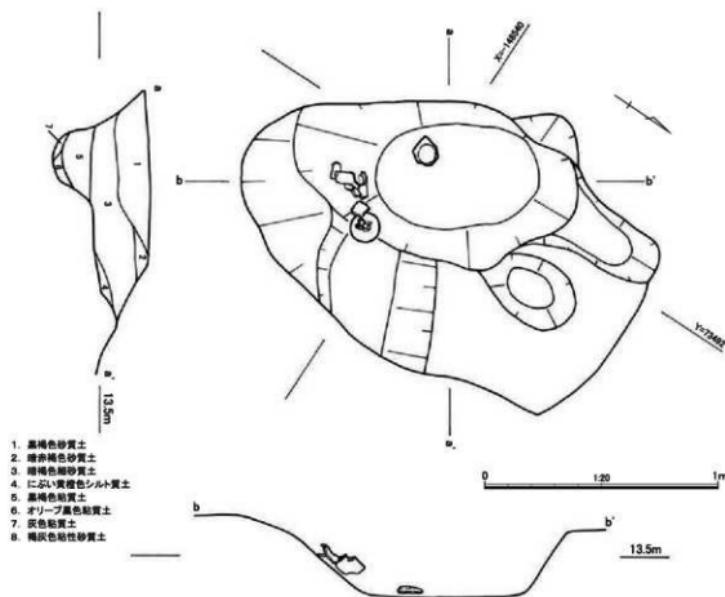
写真3 SK02 土器出土状況【左：西側（南から）、右：東側（北西から）】



第24図 SK02 出土土器実測図

SK05 6区北西側で検出した土坑である。長径 1.8 m、短径 1.2 m、深さ 0.4 mを測る。遺構の上端の形状は梢円形を呈すが、下端の形状から複数の遺構が組み合っている可能性がある。埋土からは、28ℓコンテナ1箱程度の弥生土器が出土した。出土した土器から弥生時代中期（IV-1～2様式）のものと考えられる。

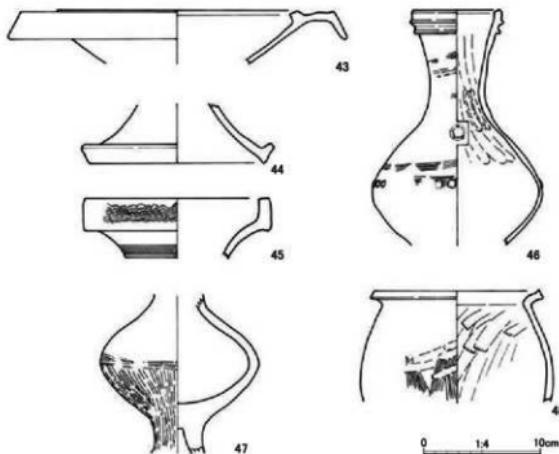
43～48は弥生土器である。43は水平口縁高杯の口縁部であり、44と同一個体と考えられる。43の口縁部は水平に伸び端部で屈曲する。口縁部と坏部との境に突帯を巡らす。44は脚裾部が短く屈曲して立ち上がり、端部は平面を作る。45は受口壺である。頸部外面に櫛描文、口縁部外面に8条以上の櫛描波状文を施す。46は細頸壺である。胴部は算盤玉状を呈する。内面はナデ上げを施す。外面は表面剥離のため不明瞭であるが櫛描文を施したものとみられる。口縁部外面に突帯を2条巡らし、胴部外面には櫛描文を施したのち円形浮文を貼り付ける。47は脚



第25図 SK05 平・断面図

付細頸壺と考えられる。胴部は扁球状を呈する。器壁は厚く重量感がある。48は壺である。頸部が「く」字状に屈曲し短くのび、口唇部は面取りを行う。

SK08 SB04の南西部に位置し、建物を切り込む土坑である。調査範囲外に広がる。検出長は東西2.2m、南北0.7m、平面橢円形を呈する土坑と考えられるが詳細は不明である。



第26図 SK05 出土土器実測図

る。深さは 0.15 m ほどで、断面形状は浅い皿状を呈する。

68 と 69 は弥生土器である。68 は長頸広口壺である。口縁部は頸部との境から水平方向に開き、内面に3条の突帯を貼り付ける。69 は甌である。胴部はゆるく内湾して立ち上がり、頸部の屈曲はゆるく、口唇部は丸くおさめる。外面に被熱痕を残す。

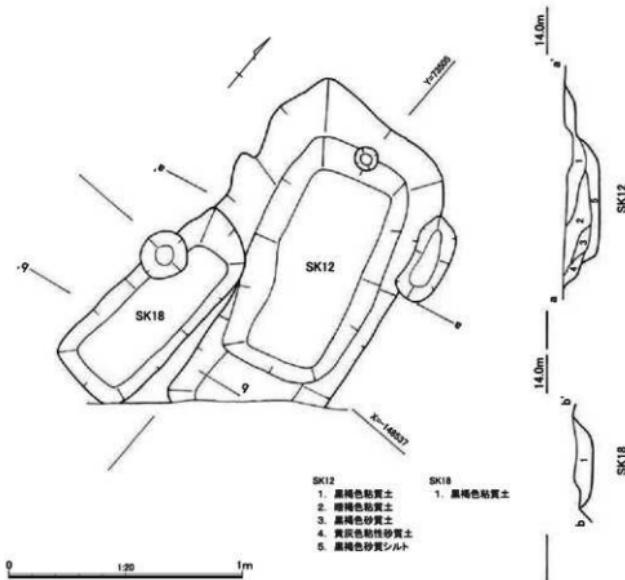
SK09 6 区から続く SD07 の東端に位置する。東西 1.4 m、南北 1.1 m を測り、平面長方形を呈する。溝 SD07 は東側にかけて徐々に浅くなっていた。溝の端部の可能性もあるが、最深部は検出面から深さ 0.3 m で、溝底との差も約 0.2 m ある。溝との明確な切り合いは確認できず、詳細は不明である。弥生時代中期の壺の底部などが出土した。

SK10 SD09 の南に隣接する土坑で西側は SD01 により切られる。南北 0.9 m、東西約 1.2 m の平面楕円形の土坑と考えられる。平面検出時に大型の壺の底部や胴部片、甌の底部などが出土したが土器下ですぐに底面となった。本来の土坑の深さについては不明である。

SK11 SB03 の西側で検出した長径 1.1 m、短径 0.8 m、深さ 0.2 m の平面楕円形の土坑である。南肩部から弥生土器がまとまって出土した。

62 と 63 は弥生土器である。62 は壺類の脚部と考えられ、63 は甌の底部である。62 は末広があり開脚部で、脚端部は面取りを施す。器壁の厚味から壺類の脚部と推測している。

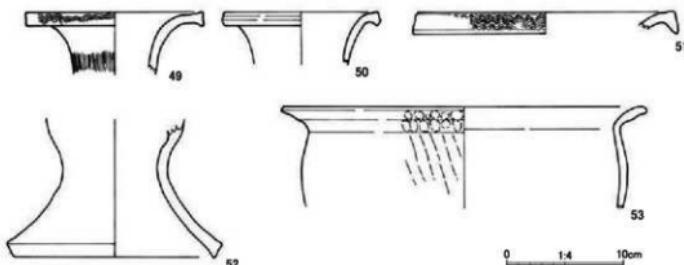
SK12 7 区南壁際で検出した南北 3.1 m 以上、東西 1.8 m の土坑である。掘り進めると同時に南西部で後述する SK18 が重複することが判明した。土坑の最大深は 0.4 m で、土坑は二段掘りで、検出面から 0.2 m 下がったところが段が付き、内側の長辺 2.1 m、短辺 1.2 m の範囲がさらに深さ



第 27 図 SK12・18 平・断面図

0.2 m掘り込まれる。土坑検出時、上面で比較的大きな土器片が集中する状況を確認した。凹線文の壺口縁部や櫛描きによる波状文や流水文で飾る壺の体部などが出土した。遺構下層埋土から出土した遺物は小片のものが多い。

49～53は弥生土器である。49～51は広口壺である。49は口縁部で強く屈曲して口唇部に強い面取りを施す。口唇部外側に4～5条の櫛描波状文を施す。50は口縁部で水平方向に短く伸びる。口唇部は肥厚し凹線文を施す。51は口縁部が垂下し、面取りを行ったのち9条の櫛描波状文を施す。52は壺類の脚部と考えられる。脚部は「ハ」字状にのび端部に面取りを施す。欠損部で剥離痕跡が確認できる。53は鉢もしくは壺である。頸部は「く」字状に強く屈曲し短く伸びる。口縁部外面はユビオサエによって整形を行う。



第28図 SK12出土土器実測図

SK13 後述する土器の破碎痕跡であるSX05の下層が土坑状を呈する。直径0.5m、深さ0.2mを測る。小片の弥生時代中期の土器片が出土した。

SK14 7区南西部に位置し、調査区外の南に続く土坑である。調査区内では東西1.2m、南北1.0mを検出した。平面楕円形を呈する土坑と考えられ、深さは0.2mである。第3遺構面の竪穴建物SB05の埋土と切り合ため南北長をやや大きく掘削した可能性がある。

70は弥生土器壺である。胴部はゆるく内湾して立ち上がり、頸部で鋭く外反し、口唇部を丸くおさめる。外面に黒斑を残す。SP66から出土した破片と接合しており、破片の移動がみられる。

SK15 南壁際で検出した。平面楕円形の土坑と考えられるが調査区南側に続き、全体の様子は不明である。検出長は東西1.1m、深さ0.1mの浅い落ち込みである。小片の弥生土器片が出土した。

SK16 SK18の東肩部で検出した南北0.8m、東西0.3mの平面楕円形の土坑である。SK18との明確な切り合いは確認できなかった。深さは0.1mで、小片の弥生土器が出土した。

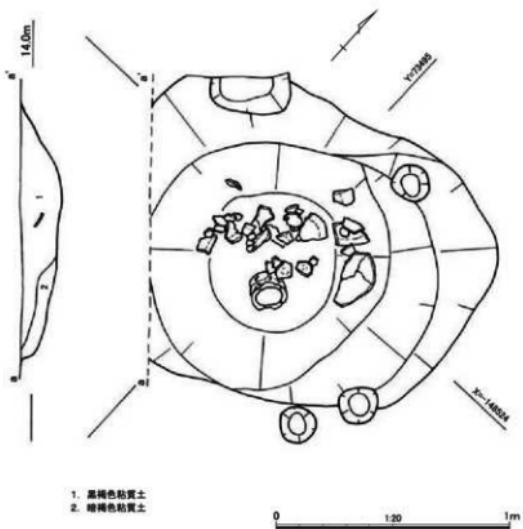
SK17 7区北壁際で一部を検出した。北側に続く。長径1.4mほどの楕円形の土坑と考えられる。小片の弥生土器片が出土した。

SK18 SK12の南西に位置する土坑である。SK12の掘削の過程で判明し、SK12から主軸をやや西に振る平面長方形の土坑となった。切り合い関係が不明瞭であり、SK12との前後関係は不明である。規模は南北1.9m、東西0.8m、深さ0.15mである。2個1対の円形浮文を付した弥生時代中期の壺口縁片などが出土した。

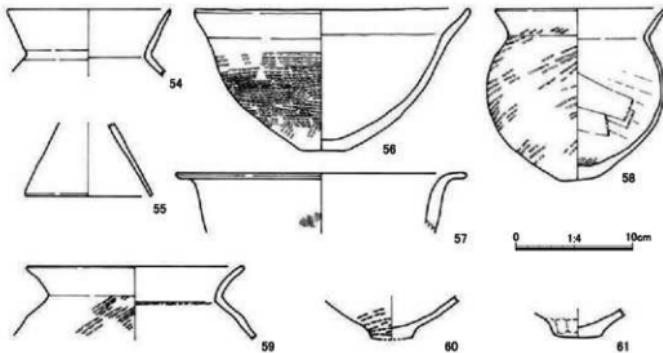
SK20 5区の西側で検出した直径1.5m以上、深さ0.2mを測る円形の土坑である。本遺構は、2区東側で検出したSP06～08と同一の遺構である可能性が高い。遺構の下層から土器がまとめて出土した。

54～61は土器である。54は小型丸底壺である。頸部は真っ直ぐに伸び口唇部は丸くおさめる。外面の胴部と頸部の境に棒状工具による凹みを巡らす。55は器台である。裾部は「ハ」字状に伸びる。器壁は薄く作る。

56と57は鉢である。56は半球状を呈し、体部と口縁部との境はさほど明瞭ではない。外面はタタキを反時計方向の螺旋状に施す。57は体部が直立気味に立ち上がり、頸部で強く屈曲して短く伸びる。58～60は外面にタタキを施した壺であり、58は小型のものである。58は体部が球状を呈し、底部との境が不明瞭な稜をもつ。頸部はゆるく「く」字状に屈曲し、口唇部は丸くおさめる。胴部と口縁部の最大径はほぼ同じものとみられる。外面は摩耗が激しくタ



第29図 SK20 平・断面図



第30図 SK20 出土土器実測図

タキ目は不明瞭である。59は頸部が「く」字状に屈曲し、口唇部を丸くおさめる。内面に頸部と胴部との接合痕が確認できる。60と61は底部である。60はタタキが施されるが、61にはみられない。

SK21 5区の北側で検出した土坑である。遺構の半分以上が調査区外に広がるため規模は不明であるが、残存長0.5m、深さ0.2mを測る。本遺構からは、弥生土器片が出土した。

SK22 5区の北側で検出した土坑である。遺構の半分以上が調査区外に広がるため規模は不明であるが、残存長1.1m、深さ0.15を測る。本遺構の上層でサヌカイトの未製品や剥片が出土した。

SK23 3区の北西側で検出した土坑である。直径1.6m以上、深さ0.25mを測る。埋土中より弥生土器やサヌカイト片が出土した。弥生土器は多数の破片が出土したが、器形が復元できるものはなかった。

SK24 3区の中央で検出した隅丸長方形の土坑である。搅乱によって大部分が失われたが、長辺1.6m、短辺0.9mの規模と考えられ、深さは0.1mを測る。埋土中からは多数の弥生土器が出土しており、甕、流水文や櫛描文を施した土器片を複数確認した。

64は弥生土器甕である。胴部が直立気味に立ち上がり、頸部は屈曲して短くのびる。口唇部外側は面取りを行ったのち、刻目を施す。外面は、頸部直下より櫛描文、櫛描波状文、ヘラ描波状文を施す。

ピット 6区の東から7区にかけて集中して検出した。このうち、SB03とSK12間のピットは遺構検出レベルで比較的大きめの土器片の出土が目立つ。6区の東と7区で検出した多くのピットで、上方が南側、下方が北側へ傾斜した状態を確認した。原因は不詳であるが、地滑り、地震、埋設された柱根へ圧力がかかったなどの要因が考えられる。なお、建物などを構成すると考えられるようなものはなかった。以下に、主なピットを記す。

SP03 1区の中央部で検出した長径0.45m、短径0.3m、深さ0.1mの楕円形のピットである。SK01を切り、埋土中に炭化物を含む。黒色の頁岩または粘板岩製の石包丁が出土した。

SP15 6区の東側で検出した直径0.5m、深さ0.2mのピットである。

67は弥生土器甕である。胴部は底部より逆「ハ」字状に開いてのびる。

SP60 7区の南側で検出した直径0.4m、深さ0.3mのピットである。

65と66は弥生土器甕である。65は体部がやや外反して真っ直ぐにのび、頸部からゆるく屈曲する。胴部外面に9条の櫛描文と5条以上の櫛描波状文を施す。

SP68 7区の中央や西側で検出した直径0.4m、深さ0.25mのピットである。SK18を切って掘削される。遺構中から長辺16cm、厚さ10cmの砥石が出土した。

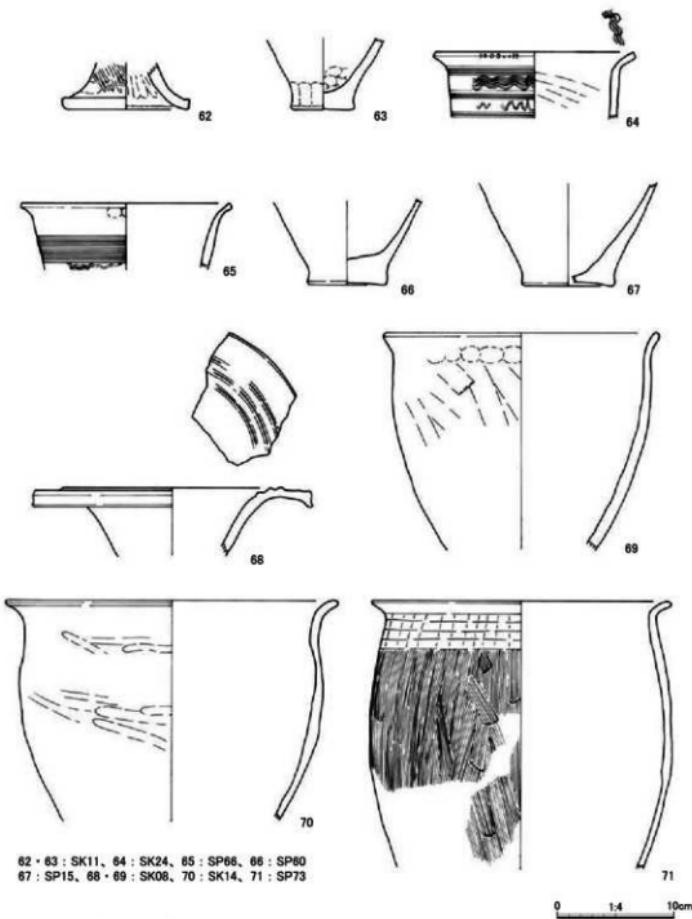
SP71 7区の西側で検出した直径0.3m、深さ0.2mのピットである。本遺構から土器は出土しなかったが、サヌカイト製の石鎌や剥片が出土した。

SP73 7区の西側で検出した直径0.5m、深さ0.25mのピットである。

71は弥生土器甕である。胴部はゆるく内湾し立ち上がり、頸部で鋭く外反し、口唇部は丸



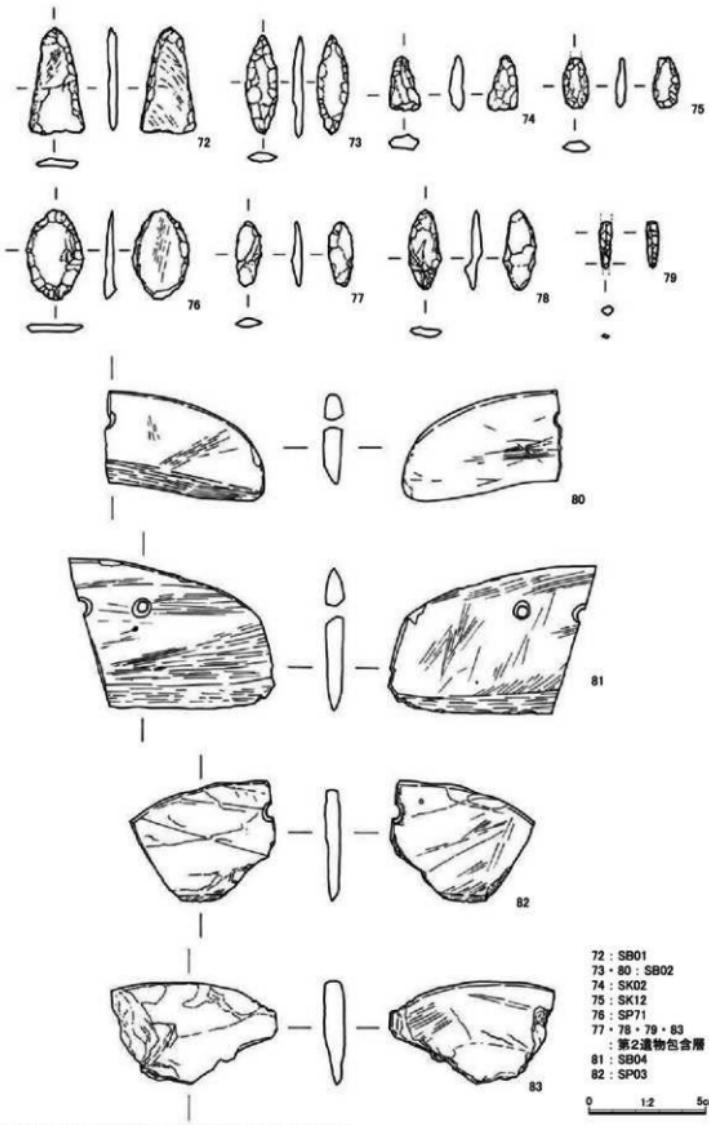
写真4 SB02-SP03 断ち割り状況（東から）



第31図 第2遺構面検出遺構出土土器実測図

くおさめる。胴部最大径が口縁部最大径よりやや大きい。外面にハケを施すが、頸部下のみヨコ方向のユビナデを加える。

**SX05・06** SK02とSK18の間で土器を破碎した跡を2基検出した。北側のSX06は櫛描文を施した小型の弥生土器の壺の一部が破碎され、細片が径0.2mの範囲にまとめられたものと考えられる。南側のSX05は径0.4mの範囲に土器片が拡がり、破片はSX06に比してやや大きい。弥生時代中期の凹線文をもつ長頸壺が破碎されたと考えられる。SX05の下位は先述の土坑SK13



第32図 第2遺物包含層～第2遺構面出土石器実測図

とした落ち込みであったが、SX06 の下は土坑状を呈しておらず、浅い窪みとなる。

石器 第1遺物包含層～第2遺構面上およびこれに伴う遺構内からは、合計約 775 gのサヌカイト片が出土した。72・73・75・76 はサヌカイト製の石鏃であり、74・77・78 は石鏃の未成品と考えられる。72 は平基無茎鏃であるが、基部が欠損のためやや回む。形状は五角形状を呈す。73 は尖基鏃である。形状は木葉状を呈す。主剥離面側は端部付近にのみ押圧剥離を施すのに対し、反対側は内側まで調整が及ぶ。74 は 73 と同様に主剥離面側に対し、反対側の調整が顕著である。

74 は三角形状に残存し、石鏃の未成品と考えられるが、基部が欠損しているため、全形は不明である。75 と 76 は円基鏃である。75 は先端が欠損するため、全形は不明である。77 と 78 はいずれも長円形に残存した剥片である。形状的に鏃の未成品と考えられるが、打ち割りに失敗したため廃棄したものとみられる。

79 は石錐である。刃部のうち基部側のみの残存であるため、全形は不明である。断面は菱形を呈す。

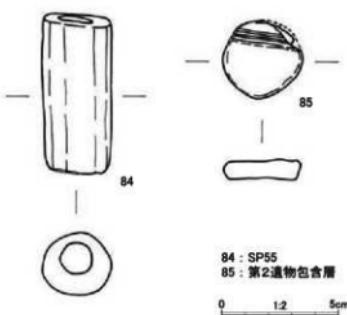
80～83 は石包丁である。いずれも頁岩または粘板岩製と考えられる。80 と 81 は淡緑色、82 は灰色、83 は灰白色である。80 は刃部の摩耗が顕著であり、大きく回む。81 は A 面・B 面とともに刃部にヨコ方向の擦痕をよく残す。B 面は体部にタテ方向の擦痕がみえる。穿孔部は B 面が上方向に摩耗し、A 面側がヨコ方向に摩耗しているため、使用時に B 面上方に紐がのびた状態での使用が推定される。82 は刃部が一部しか残存していないが、ヨコ方向の擦痕がみられる。B 面側の体部にナナメ方向の擦痕を残す。

83 は刃部を欠損し、A 面側の剥離がはげしい。B 面側にわずかに擦痕を残す程度である。

土製品 84 は SP55 から出土した管状土錐である。ほぼ完形の状態で出土した。85 は5区の第2遺物包含層から出土した土製円板である。ヘラ描沈線文を施した部位を転用する。顕著な摩耗痕などはみられない。



写真5 SX06 断面（南から）



第33図 SP55・第2遺物包含層出土土製品実測図

## 第5節 第3遺構面 弥生時代中期

第2遺構面の基盤層である暗褐色～暗オリーブ褐色粘質土以下は、安定性を欠く土層であるため、調査区の大部分で第3遺構面を確認できなかった。しかし、4区と6～7区の南側で遺構を確認した。このため、4区では黒褐色粘性砂質土上面、6と7区では暗オリーブ褐色土中のうち、遺構検出レベルを第3遺構面として調査を行った。本遺構面では、竪穴建物1棟、溝2条、土坑2基、ピット14基、性格不明遺構1基を検出した。遺構内より出土した土器から弥生時代中期（第IV様式）の遺構面と考えられる。

**SB05** 6区と7区の南側にまたがって検出した竪穴建物である。遺構の大半が調査区外へ広がるほか、東西ともに上層遺構や攪乱の影響を受けているため、全容は判然としない。ただし、少なくとも3.0m以上の規模であったと考えられる。本遺構内で溝2条、土坑2基、ピット10基を検出した。埋土や床面上から弥生土器壺や壺の破片が出土しており、弥生時代中期（第IV様式）の建物と考えられる。

**86** は弥生土器壺である。頸部は「く」字状に強く屈曲し、口縁部は受口状を呈す。

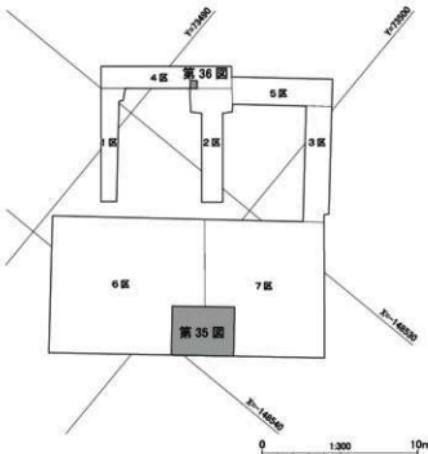
**SD11・12** いずれも幅0.1mほどの細い溝でSD11が南北方向、SD12が東西方向の溝である。上層遺構や攪乱の影響により検出範囲は狭い。SD12は低い段落ちに沿っており、この段落ちが竪穴建物SB05の北辺肩部と考えられる。6区南東部にも同様の堆積が続き、これらの範囲がSB02に先行する竪穴建物SB05であった可能性を想定する。6・7区で柱穴と考えられるピットを検出したほか、6区では炭の細粒を含む浅い落ち込みを検出した。SD11は床面の仕切り溝となる可能性がある。

**SK06** 6区の南側で検出した長径0.9m、短径0.5m、深さ0.15mの楕円形の土坑である。北側はSB04の肩部と推測される段落ちと接したものと考えられる。

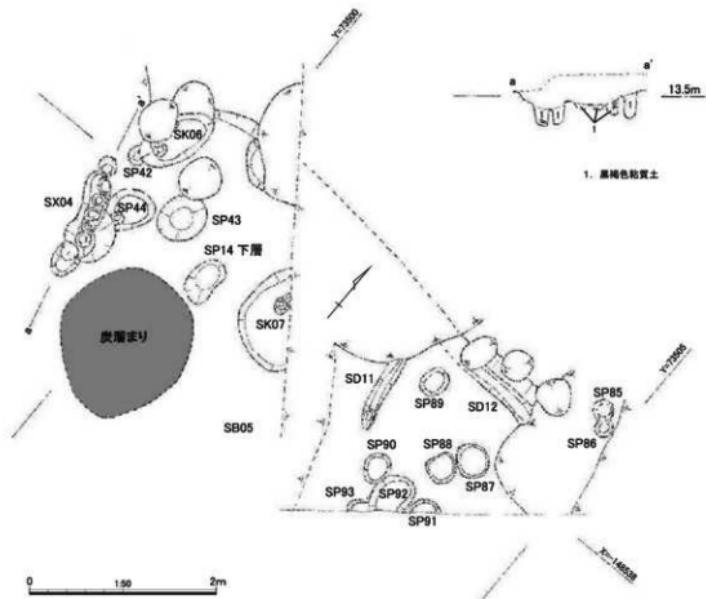
**SK07** 6区の南側で検出した直径1.1m以上、深さ0.1mの土坑である。遺構内より弥生土器が出土した。

**87** は弥生土器細頸壺である。頸部はやや外反して開き、口縁端部に面取りを施す。内面にナデ上げの痕跡をよく残す。外面はミガキを施したのち、櫛描文と櫛描波状文を加える。

**SX04** 直径10～15cm、深さ5～15cm程度の小ピットが5つ連続して穿たれた溝状の遺構である。東隣でSB05と隣接するが、これに伴うものは不明である。本遺構内では弥生土器片が出土したほか、杭状木質遺物が直立した状態で出土した。このため、小ピットは杭列を構成した可能性も考えられる。



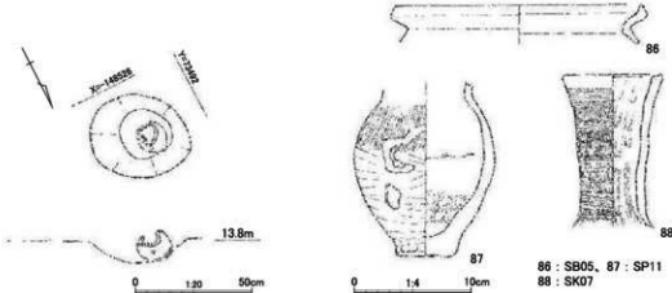
第34図 第3遺構面平面模式図



第35図 6・7区第3造構面平面図、SX04断面図

SP11 4区西側で検出した直径0.4m、深さ0.1mのピットである。弥生時代中期の土器が出土した。

88は弥生土器壺である。長胴型を呈すが、頸部以上は欠損のため全形は不明である。外面は胴部下年にユビナデ、胴部上半にミガキを施す。全体として重量感がある。胴部下年に外側から孔を1ヵ所穿つ。これに加えて胴部上半にも、穿孔状の欠損が認められるが、人為的なものかは不明である。



第36図 SP11土器出土状況平・断面図

第37図 第3造構面検出造構出土土器実測図

## 第6節 第4遺構面 弥生時代中期初頭以前

1区、2区、4区、5区東端、6区南西部、7区南東部（南トレンチ）、同区北東部（北トレンチ）の7カ所で下層確認のトレンチ調査を行った。第2・3遺構面を形成する暗褐色～暗オリーブ褐色粘性砂質土の下にシルト層と洪水層である砂層が互層堆積し、上層遺構面から0.4～0.6mほど下がった灰色～青灰色シルト層面の一部で遺構を検出した。シルト層面の標高は1区北端13.4m、南端13.4m、5区東端13.6m、6区南西部12.8m、7区北東部12.8m、7区南東部13.3mである。北側と南東側が高く、それ以外の部分は流路の影響などで下がり地形となり、湿地状の堆積が形成されていたと予測される。

### 1.7区南トレンチ

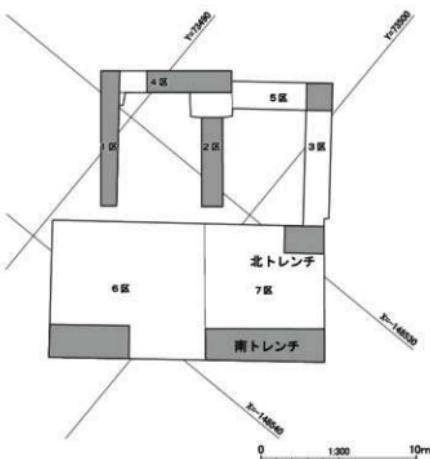
7区では、南東部（南トレンチ）と北東部（北トレンチ）の2カ所に下層確認トレンチを設けた。このうち、南トレンチの洪水層下で薄い炭層の堆積を検出した。炭層は東から8.0mの範囲で検出し、下面是黄色砂質シルト層の安定した地盤である。顕著な被熱状況を確認し、土坑、溝、ピットを検出した。このため、本土層上面を第4遺構面として調査を行った。

トレンチ西側は、粘性の強い灰色シルト層が堆積して、下がり地形を形成し、湿地状堆積へと変化する。この灰色シルト層は6区南西部の下層確認トレンチで弥生時代前期後半～中期初頭の土器溜まりを検出したシルト層と同一層である。遺構面の高さは7区で標高13.3m、6区では12.8mである。7区南トレンチの第4遺構面では、溝2条、ピット13基、性格不明土坑3基を検出した。

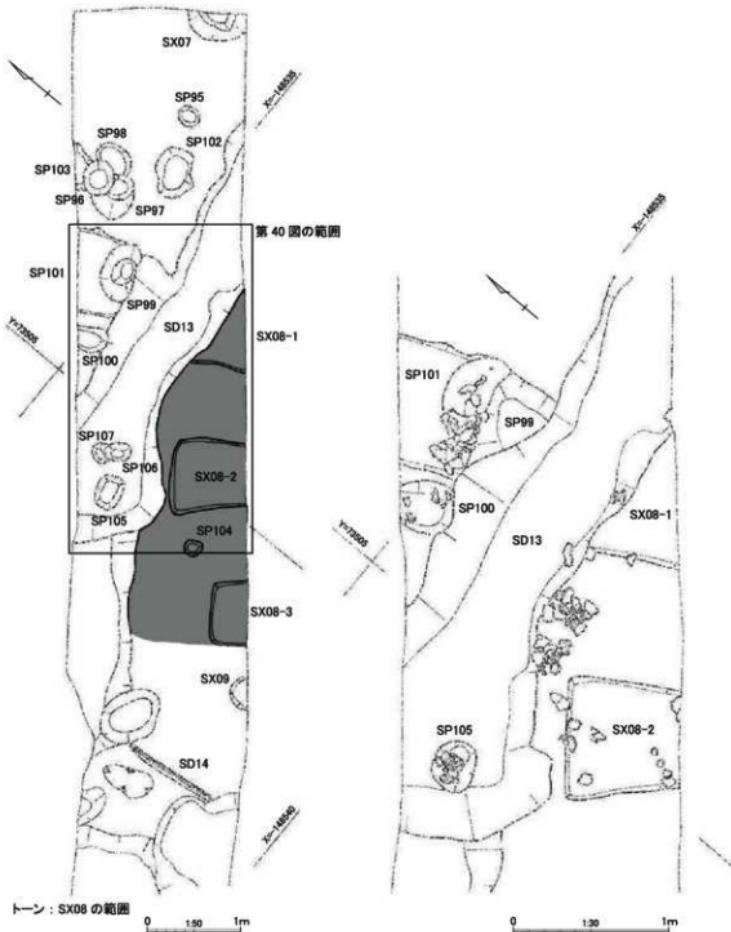
**SD13** トレンチの中央で検出した東西方向の溝である。幅約0.7～1.2m、深さ約0.2m、灰色細砂や褐色粗砂が堆積する。出土遺物は弥生時代前期後半～中期初頭のものが多いが、上層の洪水層とともにわずかながら弥生時代中期の土器片を含んでおり、溝は弥生時代中期の洪水に伴う可能性も考えられる。

**SD14** トレンチ西端で検出した。幅0.1m、検出長南北1.1m、深さは5cmほどで、白色シルトが筋状に堆積する。ここを境に西側が湿地状の堆積となる。遺物は出土していない。

**SX08** SD13の南側に堆積した炭層下面の遺構面上で顕著な被熱痕跡を検出した。炭の分布及び被熱が顕著な範囲をSX08とした。検出範囲は東西約4.0mで、調査区外の南側に拡がると考えられる。範囲内で3カ所、炭が堆積する等間に並んだ平面方形の浅い落ち込みを検出した。これらを東からSX08-01・02・03とした。このうちSX08-02は検出長南北0.9m、東西0.7mで、底部中央に円形に変色した顕著な被熱痕が見られる。SX08-02北側、SD13の肩部から弥生時



第38図 下層トレンチ配置図



第39図 7区南トレンチ第4遺構面平面図

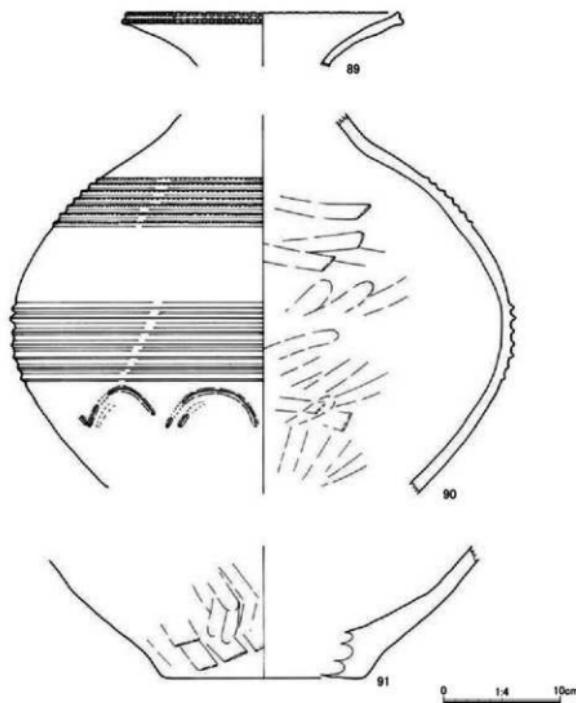
第40図 7区南トレンチ第4遺構面土器出土状況図

代前期末～中期初頭に属する大型広口壺の胴部片90が出土した。SX08-01と02の間の調査区南壁際ではかなりの熱を受けた状態の壺の胴部片が出土しており、付近で火が焚かれた痕跡と考えられる。SX08-02・SX08-03の周囲には焼骨片が散らばり、鑑定の結果、シカの角片とそのほかに中支骨の破片などが含まれることが判明した。通常、生活ゴミが投棄された土坑などから出土する動物遺存体には魚骨が少なからず含まれるようで、今回はシカの角や骨のみに特化している。このため、何らかの儀礼行為に伴う痕跡とも想定できる。

89～91は弥生土器壺である。89はラッパ状に大きく広がった口縁部をもち、口唇部は刻目を入れたのち、沈線を巡らす。90は大型広口壺である。SX08のほか、SP105と6区の下層シルト質土から出土した土器片との接合関係が確認された。胴部最大径の復元値を求めたところ、42.6cmとなつた。胴部は扁球状を呈し、中位に最大径が来る。外面は胴部中位と肩部に、ともに7条の突帯を貼り付ける。このうち、肩部のものは刻目を加える。胴部中位の方は、突帯貼り付けの前に、沈線によって割付を行い、その後突帯を巡らせる。肩部の方は不明であるが、同様と推測される。胴部下間に2条の重弧文を貼り付けによって施す。焼成は良好であるが、表面の残存状態は不良で、器壁はもろい。内面に炭化物が付着する。91は底の分厚い底部であり、外面上に板ナデとユビナデを施す。外面に被熱痕が確認でき、ススが付着する。

この他に炉跡の可能性のある遺構を検出した。調査区東壁際のSX07は径0.7m、SX08-03西側の南壁際のSX09は径0.3mで、皿状に堆積するシルト層の上に炭層が堆積するが、SX08にみられた顕著な被熱痕跡は認められない。SX07から土器片が1点出土したのみである。

炭と骨片の分布はSD13の北側、SP99・101上面でもわずかに確認できた。炭の分布範囲は

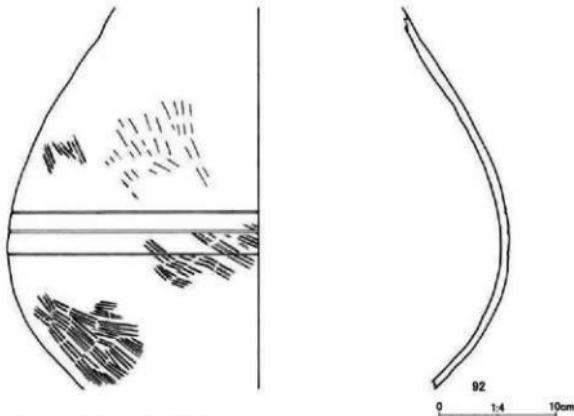


第41図 SX08出土土器実測図

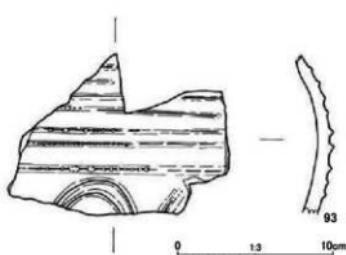
SX08-01 から北側の SP99・101 を結ぶラインを東端とし、SX08-03 の西辺を西端としており、平面的には方形プランを呈するようである。何らかの火化施設の可能性を想定しておく。

ピット トレンチ内で SP95 ~ SP107 の 13 基のピットを検出した。直（長）径 20 ~ 50 cm、深さは 10 ~ 20 cm と浅いもののが多かったが、東で検出した直径 20 cm の SP95、SX08-02 の西側で検出した上面に被熱痕のある SP104、SD13 溝底で検出した長辺 30 cm、短辺 20 cm、深さ 30 cm の平面隅丸長方形のピット SP105 はいずれも深さが約 30 cm あり、これら 3 基は柱穴の可能性が高い。SP105 からは大型広口壺片を含む複数の土器片が出土した。

92・93 は大型広口壺である。92 は SP99 と SD103 から出土した。胴部最大径の復元値を求めたところ 42.8 cm となった。外面に粗いハケ状の調整を施す。胴部の最大径付近に 3 条のヘラ描沈線を入れるが、摩耗のため所々でみられなくなる。93 は SP105 から出土した。胴部中位から下半部にかけての部分と考えられる。外面にナデ調整を施したのち、突帯を 7 条以上貼り付け、突帯に刻目を施す。また、2 条以上の重弧文を施す。突帯や刻目の残存状況は 90 に比して良好である。これらが同一個体かは不明である。



第 42 図 SP99 出土土器実測図



第 43 図 SP105 出土土器実測図



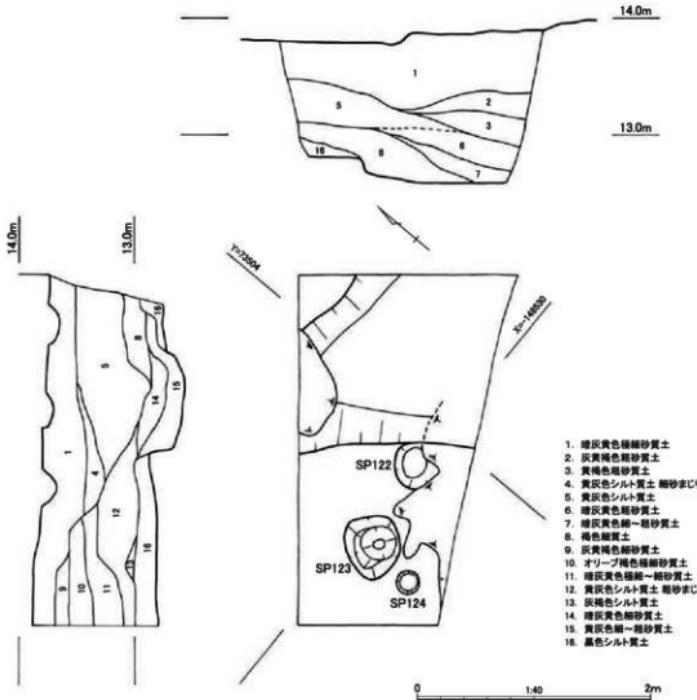
写真 6 SP105 半截状況（東から）

## 2. 下層シルト質土層

7区でまとまった遺構を検出した。それ以外の調査区では、落ち込みないし溝状と考えられる遺構を2・4区境、7区北東部、7区南東部、6区南西部で確認した。また事前確認に伴う6区の試掘坑断面でも浅い落ち込み状のものを確認している。灰色～青灰色シルト面に形成された黒色シルトや暗灰色シルトを埋土とする浅い落ち込みから土器が出土する状況で、人為的な掘削というよりは自然地形の窪みに土器が溜まった状況と考えられる。

**7区 北トレンチ** 東西 3.0 m、南北 1.5 mほどのトレンチを設定した。東半は洪水層により大きく削られる。トレンチ西側で灰色シルト面を検出し、ピット3基を確認した。

SP123 は径 50 cm、深さ 40 cmで平面形はやや歪な円形である。埋土は黒色粘土で弥生土器片と木片、種子などが出土した。



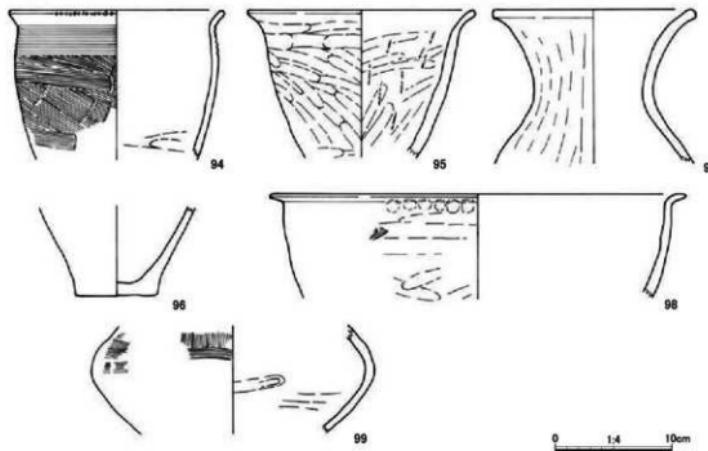
第 44 図 7区北トレンチ平・断面図

**出土遺物** 下層確認中に弥生土器、縄文土器、石包丁、土製円板などを得た。個々の出土位置については遺物観察表に記載する。94～102は弥生土器である。94～96・100～102は壺である。94は内湾して立ち上がった体部に短くのびる口縁部をもつ。口唇部外面に刻目、その下部にヘラ描沈線を6条巡らす。95は94よりもゆるく内湾し、口縁部はわずかに外反する。内面に板ナデのちユビナデを施すが、板ナデの工具痕を残す。外面に黒斑がみえる。96は内面に円形コゲがみえる。100～102は逆L字口縁をもつ破片である。いずれも口縁部外面に突帯を付し、その下部にヘラ描沈線文を施すが、100と101は突帯に刻目を入れる。101は突帯よりも体部側が上部に出る。97と99は壺である。97は頸部でいたん絞ったあと、口縁部までラッパ状に開く。外面に黒斑がみえる。99は外面に炭化物が付着する。また、図化を行っていないものの、同一個体と考えられる底部片が出土している。98は鉢である。体部は半球状を呈したものと推測され、口縁部は水平方向に強く屈曲する。外面においてススの付着が顕著にみられる。

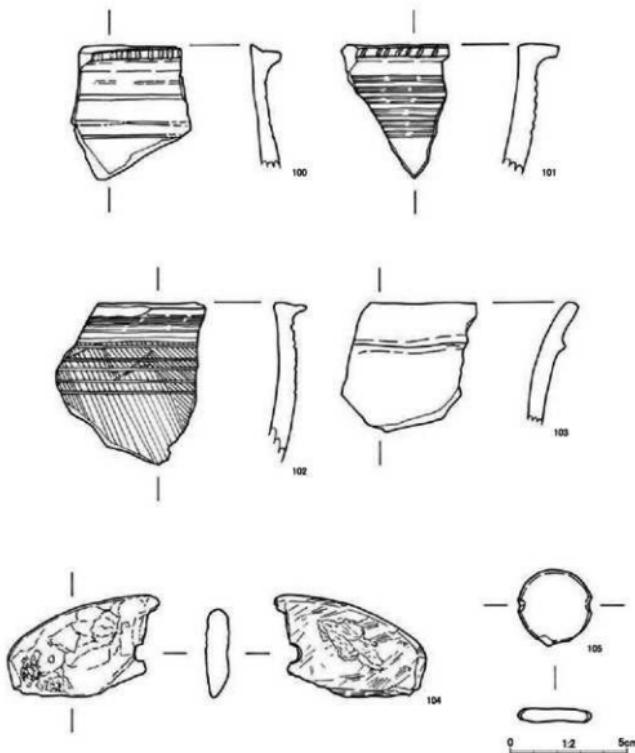
103は縄文土器である。全体として摩耗が激しいものの、外面口縁部下に突帯をもつ。長原式のものと考えられる。

104は黒色の頁岩または粘板岩製の石包丁である。A面は剥離がはげしく擦痕などの状況は不明である。B面は刃部にヨコ方向、体部にナナメ方向の擦痕が明瞭に残り、光沢も強い。厚さが1cm程度あり、重量感がある。

105は土製円板である。対辺同士がわずかに摩耗する箇所がみられたため、土器片錐として利用した可能性も考えられるが、判然としない。



第45図 下層シルト質土層出土土器実測図



第46図 下層シルト質土層出土遺物実測図



写真7 6区 下層トレンチ土器出土状況（北から）





## 第3章 自然科学的考察

### 第1節 放射性炭素年代測定

バレオ・ラボ AMS 年代測定グループ  
伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹  
Zaur Lomtatidze・小林克也

#### 1. はじめに

兵庫県神戸市の戎町遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

試料は、SX08 から出土した炭化穀実2点（試料 No.S-1 : PLD-42296、試料 No.S-2 : PLD-42297）と、同じく SX08 から出土した土器の外面付着炭化物1点（試料 No.S-3:PLD-42298）の、計3点である。時期は、いずれも弥生時代前期末と考えられている。測定試料の情報、調製データは第5表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（バレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、曆年代を算出した。

第5表 測定試料および処理

| 測定番号      | 遺跡データ                  | 試料データ                               | 前処理  |
|-----------|------------------------|-------------------------------------|--|
| PLD-42296 | 遺構 : SX08<br>試料 No.S-1 | 種類 : 炭化穀実（玄米）<br>状態 : dry           | 超音波洗浄<br>有機溶剤処理 : アセトン<br>酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 : 1.2 mol/L,<br>水酸化ナトリウム : 1.0 mol/L, 塩酸 : 1.2 mol/L)<br>グラファイト化 |
| PLD-42297 | 遺構 : SX08<br>試料 No.S-2 | 種類 : 炭化穀実（玄米）<br>状態 : dry           | 超音波洗浄<br>有機溶剤処理 : アセトン<br>酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 : 1.2 mol/L,<br>水酸化ナトリウム : 1.0 mol/L, 塩酸 : 1.2 mol/L)<br>グラファイト化 |
| PLD-42298 | 遺構 : SX08<br>試料 No.S-3 | 種類 : 土器付着炭化物<br>部位 : 外面<br>状態 : dry | 超音波洗浄<br>有機溶剤処理 : アセトン<br>酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 : 1.2 mol/L,<br>水酸化ナトリウム : 0.1 mol/L, 塩酸 : 1.2 mol/L)<br>セメント化   |

#### 3. 結果

第6表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代、曆年較正結果を、第 47 図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下 1 衍を丸めていないのであり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$  年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.27% であることを示す。

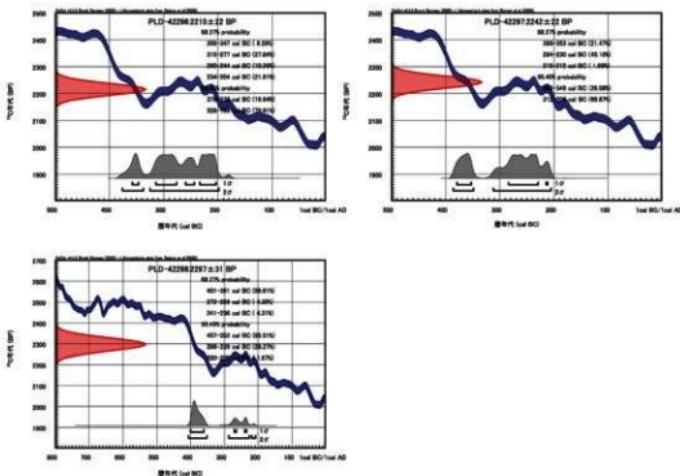
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第6表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

| 測定番号                   | $\delta^{13}\text{C}$<br>(‰) | 暦年較正用年代<br>(yrBP ± 1σ) | <sup>14</sup> C年代<br>(yrBP ± 1σ) | <sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲  |  |
|------------------------|------------------------------|------------------------|----------------------------------|---|--|
|                        |                              |                        |                                  | 1σ暦年代範囲   | 2σ暦年代範囲  |
| PLD-42296<br>試料 No.S-1 | -26.06 ± 0.30                | 2215 ± 22              | 2215 ± 20                        | 358-347 cal BC (8.26%)<br>315-277 cal BC (27.84%)<br>260-244 cal BC (10.26%)<br>234-204 cal BC (21.91%) | 376-338 cal BC (16.64%)<br>326-199 cal BC (78.81%)                           |
| PLD-42297<br>試料 No.S-2 | -27.68 ± 0.23                | 2242 ± 22              | 2240 ± 20                        | 380-353 cal BC (21.47%)<br>284-230 cal BC (45.10%)<br>215-212 cal BC (1.69%)                            | 386-349 cal BC (26.58%)<br>312-206 cal BC (68.87%)                           |
| PLD-42298<br>試料 No.S-3 | -22.94 ± 0.14                | 2297 ± 31              | 2295 ± 30                        | 401-361 cal BC (59.61%)<br>272-266 cal BC (4.35%)<br>241-236 cal BC (4.31%)                             | 407-352 cal BC (65.51%)<br>288-228 cal BC (28.27%)<br>220-209 cal BC (1.67%) |



第47図 暦年較正結果

#### 4. 考察

以下、 $2\sigma$ 暦年代範囲（確率 95.45%）に着目して結果を整理する。なお、弥生土器と暦年代との対応関係については、若林（2018）および藤尾（2013）を参照した。

SX08 から出土した炭化種実（試料 No.S-1 : PLD-42296）は、376–338 cal BC (16.64%) および 326–199 cal BC (78.81%) で、紀元前 4 世紀前半～2 世紀初頭の暦年代を示した。また、炭化種実（試料 No.S-2:PLD-42297）は、386–349 cal BC (26.58%) および 312–206 cal BC (68.87%) で、紀元前 4 世紀前半～3 世紀末の暦年代を示した。炭化種実の測定結果は、種実の結実年代を示す。

SX08 から出土した土器の外面付着炭化物（試料 No.S-3 : PLD-42298）は、407–352 cal BC (65.51%)、288–228 cal BC (28.27%)、220–209 cal BC (1.67%) で、紀元前 5 世紀末～4 世紀中頃および紀元前 3 世紀前半～末の暦年代を示した。

今回の試料 3 点の測定結果は、いずれも弥生時代前期後半～中期前半に相当する暦年代を示した。発掘調査所見による推定時期は弥生時代前期末であり、調査所見と測定結果は整合的であった。

#### 引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337–360.
- 藤尾慎一郎 (2013) 弥生時代文化像の新構築. 275p. 吉川弘文館.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C 年代 : 3–20. 日本国第四紀学会.
- 大森貴之・山崎孔平・権澤貢行・板橋 悠・尾崎大真・米田 優 (2019) 推量試料の高精度放射性炭素年代測定. 第 20 回 AMS シンポジウム報告集, 55.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Henton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Caprino, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, P., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725–757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> [cited 12 August 2020]
- 若林邦彦 (2018) 近畿地方弥生時代土器諸様式の暦年代—石川県八日市地方遺跡の研究成果との対比. 同志社大学考古学シリーズ第 1 番 実証の考古学, 119–129.

## 第2節 戎町遺跡第72次調査の動物遺存体

丸山真史（東海大学）

戎町遺跡では、第1次調査において弥生時代前期・中期・後期の動物遺存体が出土している。ハモ、タイ類、フサカサゴ科、エイ・サメ類、哺乳類ではイノシシとシカが同定されているが、出土資料の大部分は被熱した種不明の魚骨である（松井 1989）。今回の調査では、1区、3区、6区、7区で出土した弥生時代および中世の動物遺存体であり、第1次調査と同様に大部分が被熱したものである。

当調査で出土した動物遺存体は、一部を除き、被熱したことで白色を呈する。第7表では、出土資料のなかでも収納された袋別に一覧を示している。種類や部位が判明したものを含む袋には、第7表には掲載していないが、多数の小片、細片がある。1区で頸骨から遊離したウマの上顎臼歯が1点出土しており、これは被熱していない。3区では、いずれも被熱した種不明の微細片が出土している。6区では、イノシシかシカか区別できない上腕骨（右）が1点出土している。7区の出土資料は、最も多く種類や部位を同定できた。注目されるのは、第4遺構面（弥生時代前期）で、東西4m、南北2mの範囲に焼骨や炭が散乱しており、炭が集中するSX08では被熱した動物遺存体が一定量出土していることである。種類が判明したのはシカ *Cervus nippon* だけであり、部位は枝角、中手骨、手根骨、中足骨を同定した。これらの部位は食用にならない、あるいは肉量が少ない部位である。

第1次調査で出土した魚種は食用となるものばかりであり、食後に炉に廃棄するなどして被熱したものと考えられる。また、大開遺跡の弥生時代前期の遺構でも、同様に被熱して白色を呈する魚骨、イノシシやシカなどが出土している（松井 1993）。縄文時代には、長野県、新潟県、山梨県などで、焼獸骨が一定量出土する遺跡があり、食料残滓、動物祭祀、人の埋葬にかかるものなどの議論がある（高山 1976・1977、西本 1983、金子 1984）。また、再生や多産を祈る動物儀礼、豊獣を願う狩猟儀礼などの意見もだされている（新津 1985）。

遺跡における骨の保存状態は生骨より焼骨の方が良い場合があり、特に高温で長時間被熱した白色の骨は微細片となっていても保存されている。弥生時代では、高知県の田村遺跡群において強く被熱した動物遺存体が出土しており、それらは祭祀や儀礼に伴うものではなく、食料残滓と考えている（丸山・松井 2004）。この田村遺跡群の動物遺存体と同様に、戎町遺跡第1次調査、大開遺跡ともに食料残滓と考えられるのに対して、今回の資料は食用にならない鹿角と肉量が少ないシカの中手骨・中足骨である。また、それらは、骨角器の素材となる部位であることにも特徴がある。本資料は、被熱して若干の変形が生じているだけで、表面に加工痕は見られず、製品とは考えられない。あるいは、弥生時代でもシカの角、中手骨、中足骨は骨角器の素材として貴重であり、加工中に生じた廃材という可能性もある。道具を火中に投じるなど、何らかの儀礼を想定しても良いかもしれない。しかし、生骨が保存状態に恵まれなかっただけの可能性もあり、積極的に祭祀・儀礼的な意義を求めるることはできない。戎町遺跡での出土例が増加すれば、詳



写真8 被熱した動物遺存体

細の議論が可能となるであろう。そのためには、本調査のように、調査中の動物遺存体の丁寧な取り上げ、動物遺存体を含む土壌の水洗選別の実施が望まれる。

#### 参考文献

- 金子浩昌 1984 「動物遺存体」『なすな原遺跡-No.1 地区調査 -』なすな原遺跡調査会 pp.580-596  
 高山 純 1976 「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義・上」『史学』47-4 pp.301-334  
 高山 純 1977 「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義・下」『史学』48-1 pp.49-74  
 新津 健 1985 「縄文時代後晩期における焼けた骸骨について」『日本史の黎明』六興出版 pp.125-153  
 西本豊弘 1983 「縄文時代の動物と儀礼」『歴史公論』94 桐山閣 pp.52-56  
 松井 寧 1989 「亥町遺跡第1次発掘調査出土の動物遺存体」『亥町遺跡第1次発掘調査報』神戸市教育委員会 pp.127-129  
 松井 寧 1993 「神戸市大岡遺跡出土の動物遺存体」『大岡遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 pp.283-287  
 丸山真史 2010 「動物遺存体の分析」『上里遺跡I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第24号 (財)京都市文化財研究所 pp.147-149  
 丸山真史 2017 「中西遺跡第14～16次調査区出土の動物遺存体」『中西遺跡I』奈良県立橿原考古学研究所 pp.506-512  
 丸山真史・大藪由美子 2013 「般音寺木馬遺跡III区から出土した動物遺存体」『般音寺木馬遺跡I』附録 CD 奈良県立橿原考古学研究所  
 丸山真史・松井 寧 2004 「田村遺跡群出土の動物遺存体」『田村遺跡群II第8分冊』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター pp.316-322

第7表 動物遺存体一覧

| No. | 地区      | 層位                    | 大分類  | 小分類      | 部位   | 左右 | 備考           |
|-----|---------|-----------------------|------|----------|------|----|--------------|
| 1   | 1 区     | 第1面上 南 落ち際            | 哺乳綱  | ウマ       | 遊離歯  | -  |              |
| 2   | 3 区     | SK25                  | 哺乳綱  | 不明       | 不明   | -  | 細片、被熱 (白色)   |
| 3   | 6 区     | SD05                  | 哺乳綱? | 不明       | 不明   | -  | 細片、被熱 (白色)   |
| 4   | 6 区     | 黒灰色スミ混シルト             | 不明   | 不明       | 不明   | -  | 細片、被熱 (白色)   |
| 5   | 6 区     | SH02 ~ SK01           | 哺乳綱  | イノシシ/シカ? | 上腕骨  | 右  | 小片、被熱 (白色)   |
| 6   | 6 区     | SB02 ~ SP03           | 哺乳綱? | 不明       | 不明   | -  | 細片、被熱 (白色)   |
| 7   | 7 区     | SB03                  | 哺乳綱? | 不明       | 不明   | -  | 細片、被熱 (白色)   |
| 8   | 7 区     | SK02                  | 哺乳綱  | 不明       | 不明   | -  | 細片、被熱 (白色)   |
| 9   | 7 区     | SK02 西土器              | 哺乳綱  | 不明       | 不明   | -  | 細片、被熱 (白色)   |
| 10  | 7 区南トレチ | SX08 西端灰色シルト中         | 哺乳綱? | 不明       | 遊離歯? | -  | 細片、被熱?       |
| 11  | 7 区南トレチ | SX07 東端               | 哺乳綱  | 不明       | 不明   | -  | 細片、被熱 (白色)   |
| 12  | 7 区南トレチ | SX08-2 SD13 南肩メッシュ釘近辺 | 哺乳綱  | シカ       | 中手骨  | -  | 細片、被熱 (白色)   |
| 13  | 7 区南トレチ | SX08-2 SD13 南肩第4面     | 哺乳綱  | シカ       | 枝角   | -  | 小片、被熱 (白色)   |
| 14  | 7 区南トレチ | SX08-2 基準杭周辺          | 哺乳綱  | シカ       | 中足骨  | -  | 細片、被熱 (白色)   |
| 15  | 7 区南トレチ | SX08-2 基準杭周辺          | 哺乳綱  | シカ       | 手根骨  | 左  | ほぼ完形、被熱 (白色) |
| 16  | 7 区南トレチ | SX08-2 基準杭周辺          | 哺乳綱  | 不明       | 四肢骨  | -  | 小片、被熱 (白色)   |
| 17  | 7 区南トレチ | SX08-2 基準杭周辺          | 哺乳綱  | 不明       | 四肢骨  | -  | 小片、被熱 (白色)   |
| 18  | 7 区南トレチ | SX08-2 基準杭周辺          | 哺乳綱  | 不明       | 四肢骨  | -  | 小片、被熱 (白色)   |
| 19  | 7 区南トレチ | SX08-2                | 哺乳綱  | シカ       | 中足骨? | -  | 小片、被熱 (白色)   |
| 20  | 7 区南トレチ | SX08-2                | 哺乳綱  | シカ       | 枝角   | -  | 小片、被熱 (白色)   |
| 21  | 7 区南トレチ | SX08-3 南壁際 黒色プラン西辺    | 哺乳綱  | シカ       | 枝角   | -  | 小片、被熱 (白色)   |
| 22  | 7 区南トレチ | SX08-3                | 哺乳綱  | シカ       | 枝角   | -  | 小片、被熱 (白色)   |
| 23  | 7 区南トレチ | SX08-3                | 哺乳綱  | シカ       | 枝角   | -  | 先端部、被熱 (白色)  |
| 24  | 7 区北トレチ | SP123                 | 哺乳綱  | イノシシ/シカ  | 四肢骨  | -  | 小片           |

## 第4章 まとめ

### 第1節 戎町遺跡第72次調査の成果概要

今回の調査では、4面の遺構面と、それぞれに伴う遺構および遺物を得た。遺物は、総数で28点コンテナ31箱分であり、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、飯蛸壺、石鏃、石錐、磨製石斧、土錐などが出土した。以下に本調査で得た成果について概要をまとめる。

**堅穴建物** 弥生時代中期（第IV様式）のもの4棟、庄内式期のもの1棟の合計5棟を検出した。この成果によって、戎町遺跡における堅穴建物の検出数は、弥生時代中期で26棟、庄内式期で10棟となった。既往の調査成果では、第III様式のものが最も多く、この時期が戎町遺跡における最盛期と考えることができる（第8表）。しかし、今回の調査において、これに続く年代の建物がまとまって検出できたことは、戎町遺跡における集落の継続状況を考えるうえで重要な成果といえる。

庄内式期のSB01では土器がまとまって出土した。検討の結果、埋土上層で出土した土器片と底面直上から出土したものとが接合することが判明し、一括性の高い土器群といえる。甕や小型器台の形状から西撰5様式（森岡・竹村2006）前後のものと考えられる。なお、SK20でも庄内式期の土器がまとまって出土したが、SB01と同時期かそれよりも1段階新しいものとみられる。

SB02でも多くの土器が出土した。その内訳は、甕片が多く、次いで壺片である。高坏片はさほど確認できなかった。このほか、飯蛸壺や石包丁といった生産具が出土した。漁具である飯蛸壺と、農具である石包丁が、ともに床面上で出土したことは、戎町遺跡の生産活動を考えるうえで興味深いといえる。甕は「く」字形口縁が主体であることや、直口壺の頸部に回線文を施すことなどから、SB02の年代はIV様式でも後半段階のものと考えられる。

SB03とSB04は出土した土器が少量であるため、詳細な時期は不明であるが、いずれもIV様式のものと推定される。SB04の平面は不定形であるが、隣接する第17次調査のSB101は梢円形を呈しており、これに類するものと考えられる。

SB05も第IV様式の範疇に入るものと考えられるが、SK07から細頸甕のほか、口縁内突帯広口壺片が出土していることから、やや古くなる可能性がある。

**SK02・12・18・SX05・06** SK02では、砂岩製の平石によって破碎されたような状態の壺が出土した。戎町遺跡では第50-3次調査のSD01や、第50-6次調査のSX01でも同様の状態の甕が出土しており、これらは周溝墓の周溝で行われた破碎行為に伴うものと考えられている。これらの事例と関連する可能性もあるが、今回のSK02では破碎された土器は、壺であることや、破碎された土器が完形に復元できないといった違いがある。ただし、SK02は大部分が後世に攪乱を受けているため、破碎された土器片が失われた可能性は十分に考えられる。

また、SK02とその南東側に位置するSK12とは、中軸の延長線が直交して掘削される関係にある。出土した土器の年代的な隔たりではなく、これらは同時期に存在したものとも考えられる。周囲をみると、SK12よりやや小型のSK18や、土器片が散らばったSX05・06が隣接して検出された。これに関連して想起される事例が、第38-11次調査検出の周溝墓である。本遺構は、主体部と周溝2条、破碎された土器を含むSK01からなり、本調査で検出したSK02・12・18、SX05・06と類似した構成をとる。このことを積極的に評価するのであれば、これらは周溝墓を構成する遺構である可能性も指摘できる。具体的には、SK02・12が周溝、SK18が主体部、SX05・06が破碎行為に伴って設けられた遺構という想定もできようが、SK18が周溝側に寄ることは留意される。

第8表 戸町遺跡の弥生時代～庄内式期の調査成果

| 調査<br>次数 | 時期        |               |               |     |    | 備考             |  |
|----------|-----------|---------------|---------------|-----|----|----------------|--|
|          | 前期後半～中期初頭 | 中期            |               |     | 後期 |                |  |
|          |           | II<br>(初頭を除く) | III           | IV  |    |                |  |
| 1        | 水田        |               | 墳穴1           |     |    |                |  |
| 2        |           |               |               |     |    | 墳穴1            |  |
| 3        |           |               | 墳穴1           |     |    | 墳穴2            |  |
| 4        |           |               | 墳穴3           |     |    |                |  |
| 5        |           |               |               |     |    |                |  |
| 6        |           |               |               |     |    |                |  |
| 7        |           |               |               |     |    |                |  |
| 9        |           |               |               |     |    |                |  |
| 10       |           |               |               |     |    |                |  |
| 11       |           |               |               |     |    |                |  |
| 12       |           |               |               |     |    |                |  |
| 14       |           |               |               |     |    |                |  |
| 15       | 木棺墓1      |               | 掘立1           |     |    | 掘立1            |  |
| 17       |           |               | 墳穴1           |     |    |                |  |
| 19       | 墳穴1、木棺墓1  |               | 墳穴1、掘立2       |     |    |                |  |
| 20       |           |               | 墳穴1           |     |    |                |  |
| 21       |           |               |               |     |    |                |  |
| 22       |           | 墳穴1           |               |     |    | 墳穴4、掘立2        |  |
| 23       |           |               |               |     |    |                |  |
| 25       |           |               |               |     |    |                |  |
| 26       |           |               | 墳穴1           |     |    |                |  |
| 27       |           |               |               | 水田  |    | 水田検出は下層確認による   |  |
| 28       |           | 土器群           |               |     |    |                |  |
| 30       |           |               |               |     |    |                |  |
| 31       |           |               | 墳穴1           |     |    | 墳穴3            |  |
| 32       |           |               |               |     |    |                |  |
| 34       |           |               | 墳穴1           |     |    |                |  |
| 35       |           |               | 墳穴1、周溝墓   墳穴1 |     |    |                |  |
| 36       |           |               |               |     |    |                |  |
| 37       |           |               |               |     |    |                |  |
| 38       |           | 周溝墓           |               |     |    | 中期：墳穴1         |  |
| 39       |           |               | 掘立2           |     |    |                |  |
| 41       |           |               | 墳穴1           |     |    |                |  |
| 43       |           |               |               |     |    |                |  |
| 44       |           | 周溝墓           |               |     |    |                |  |
| 45       |           |               | 周溝墓           |     |    |                |  |
| 46       |           |               | 周溝墓           |     |    |                |  |
| 49       |           | 周溝墓(体部か)      |               |     |    |                |  |
| 50       |           | 墳穴1、周溝墓       |               |     |    |                |  |
| 51       |           |               | 周溝墓           |     |    |                |  |
| 52       |           |               |               |     |    |                |  |
| 53       |           | 墳穴1、周溝墓       |               |     |    |                |  |
| 54       |           |               | 周溝墓           |     |    |                |  |
| 55       |           |               | 周溝墓           |     |    |                |  |
| 56       |           |               | 墳穴1、周溝墓       |     |    |                |  |
| 57       |           |               | 周溝墓？          |     |    | 調査面積狭小のため不明瞭   |  |
| 58       |           |               |               |     |    | 調査面積狭小のため不明瞭   |  |
| 59       |           |               | 墳穴1           |     |    | 糞生前期以前は下層確認による |  |
| 60       |           |               |               |     |    | 調査面積狭小のため不明瞭   |  |
| 61       |           |               | 周溝墓？          |     |    | 調査面積狭小のため不明瞭   |  |
| 62       |           |               | 周溝墓？          |     |    | 調査面積狭小のため不明瞭   |  |
| 63       |           |               | 墳穴状遺構1、周溝墓    |     |    | 調査面積狭小のため不明瞭   |  |
| 64       |           |               |               |     |    | 遺物包含層のみ確認      |  |
| 65       |           |               |               |     |    |                |  |
| 66       |           |               |               |     |    |                |  |
| 67       |           |               |               |     |    |                |  |
| 68       |           |               | 墳穴1           |     |    |                |  |
| 69       |           |               | 墳穴1           |     |    |                |  |
| 71       |           |               |               | 墳穴4 |    | 墳穴1            |  |
| 72       |           |               |               |     |    |                |  |

## 凡例

■：遺構もしくは土器群確認

□：遺物のみ、流路・落ち込みのみ確認

※詳細な時期が明らかではないものは区切っていない

本調査地周辺で周溝墓は確認されていないが、戎町遺跡においては遺跡南東側で周溝墓が集中する状況がみられるところから、単体で周溝墓が存在する可能性は低いと考えられる。したがって、今後本調査地の周辺、とくに現状では調査が及んでいない西～南側で周溝墓ないし、今回のような遺構が検出されれば、本調査地周辺でも墓域が形成された蓋然性が高いといえる。

**SX08** 7区南トレンチの第4遺構面上で検出した顕著な被熱痕跡であり、炭化物を多量に含む遺構である。とくに、SX08-2 では鹿角の焼成が確認でき、周囲の遺構埋土から合計 281 粒の完形の炭化米を検出した。炭化米については欠損した個体も得ており、復元した個体数は 300 粒を超える可能性もある。本調査地と隣接する第1次調査でも、焼成されたニホンジカ、イノシシ、魚類などの動物骨を得ている。これに対し、SX08 ではニホンジカのみであることは特筆される。また、鹿角は無機質化しており、相当な温度で焼成されたと考えられる。このため、焼失した米粒もある程度存在したことが推測される。このように、SX08 は単なる炭化物の偶発的な廃棄痕跡あるいは失火による結果というよりは、何らかの人為的な痕跡と理解できよう。第1次調査では、弥生時代中期初頭以前の水田が検出されており、今回検出した炭化米と関連させることで SX08 を祭祀痕跡とする考えもできようが、ここで行われた行為の目的が判然とせず、積極的な根拠を欠く。したがって、現状では SX08 は儀礼行為の可能性も含む人為的痕跡としておきたい。

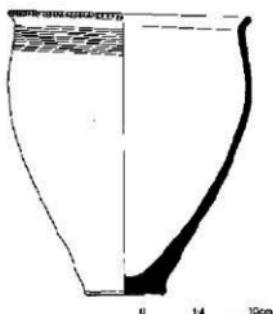
## 第2節 第4遺構面出土土器の年代的位置付け

**暦年代** SX08 から出土した炭化米と、大型広口壺 90 に付着した炭化物を対象に、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、炭化米に比して、土器付着の炭化物が 50 ~ 80 年ほど古く示された。土器付着の炭化物に対しては、放射性炭素年代測定法の実施以前に、起源物質の推定のため炭素・窒素安定同位体比分析の実施を予定していたものの、試料が少量しか得られなかつたため、分析を断念した。ただし、試料中には灰由来の白色の粒が多くみられたとのことである（ペレオ・ラボ 山形秀樹・小林克也の分析による）。このため、炭化物の厳密な由来は不明であるものの、土器の出土状況から推定すると木材などとともに燃焼されたために付着したものと考えられる。木材の場合、古木効果によって測定値が古くなることが知られており（小林 2006）、本件においてもこの可能性を想定しても良いのであれば、炭化米と土器はさほど時期差がないものと想定できよう。暦年代としては、概ね紀元前3世紀前半～末のいずれかで合致するようであるが、確定的なことは今後の検討に委ねたい。

なお、戎町遺跡では、第1次調査で出土した土器付着の炭化物に対して（第49図）、国立歴史民俗博物館によって年代測定が実施されている（西本編 2006）。これによると、炭素年代( $^{14}\text{C}$ BP) が  $2395 \pm 40$ 、較正年代 (calBC) 確立第1位が 555-390 (78.8%)、同第2位が 745-685 (12.5%)、



第48図 第38-11次調査の周溝墓  
(藤井編 2005 を一部加工)



第49図 第1次調査出土の土器〔山本編 1989〕

同第3位が665-645（3.2%）との値を得ている。同館の調査当時と現在とでは、曆年校正曲線が異なるため世紀な比較は行えないが、今回はこれよりも新しい年代値を得たことになる。

相対年代 第4遺構面の年代を示す資料として、SX08・SP99出土の土器（第41・42図、89～92）のほか、大型広口壺90の破片と共に出土した94・97・99がある（写真7）。

90は宽带による重弧文を配した壺で、戎町遺跡において同種の出土は報告されていないが、尼崎市田能遺跡の第4N調査区の第8溝でこれに類したものが出土地おり、振津I・4様式に位置付けられている（森田1990）。92は最大径が胴下半部に来る形状が想定され、形態的にはやや古い様子がみえる。ただ

し、外面の調整に、ミガキではなく粗いハケ状の工具を用いる点は、神戸市内出土の大型広口壺とは異なる点といえる。また、洞部に沈線文による区画が施される点は、第1次調査で出土した土器にもみられる。これらのことから、92は形態に示されるよりも新相のものと考えたい。94は如意形口縁を呈し、ヘラ描沈線文をり角施す壺である。90と同じ年代のものと考えられる。99は胴部外面にハケを施す。ハケ日は細かく、植物纖維を束ねたものと推測される。

このほか、図示できなかったもののなかに、頸部にケズリ出し段をもつものと貼り付け突帯をもつ壺を確認している。胴部片は貼り付け突帯を多条施したもの複数出土したが、ケズリ出し突帯はみられなかった。このため、洞部に貼り付け突帯、頸部にケズリ出し段をもつ広口壺が存在した可能性が高い。また、文様を施した破片は出土しなかった。

逆L字口縁壺は、第4遺構面上では出土していないが、調査区内に設定した下層トレンドで3点出土している。ヘラ描沈線文は4条、6条、8条のものを各1点ずつ確認した。いずれも7区南トレンド以外出土したため、第4遺構面出土十器との層位的な前後関係は判然としないが、下層に属する壺性が高い。

以上のことから、第4遺構面の年代は、逆L字口縁壺出現以降、ハケ調整出現以前に位置付けることが出来る。近畿地方西部では、多条ヘラ描き沈線文の如意形口縁壺と逆L字口縁壺が中期初頭まで共存して残ることが指摘されており（若林2003）、これによれば弥生時代中期初頭の所産とすることができる。しかし、大型広口壺については、90・92ともに他の壺・甕に比べ古い様相を呈する状況がうかがえる。このため、前期末まで遡る可能性があり、従来の年代観でいうI-4～II-1様式のものとして位置付けられよう。

この年代は、戎町遺跡第1次調査の第3遺構面で検出した河原出土の土器群と概ね同年代のものといえる。この河原出土の一群は、明石川流域へ六甲山南麓地域における弥生時代前期末～中期初頭の基準資料と評価されており（若林2003・2015）、今回の第4遺構面出土の土器もここに加わるものと考えられる。とくに、大型広口壺の様相を考えるうえで重要な資料として位置付けることができよう。

### 第3節 戎町遺跡における弥生時代～庄内式期の遺跡変遷

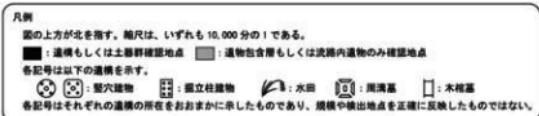
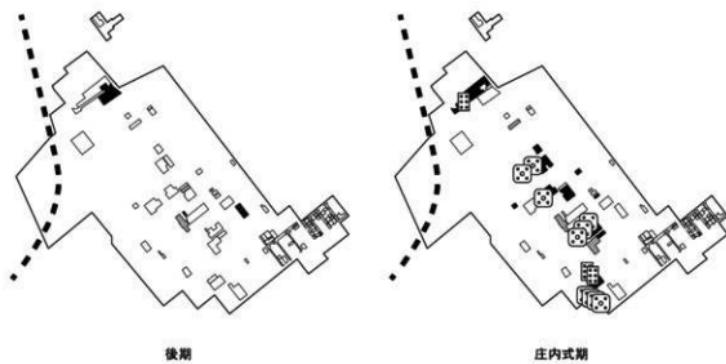
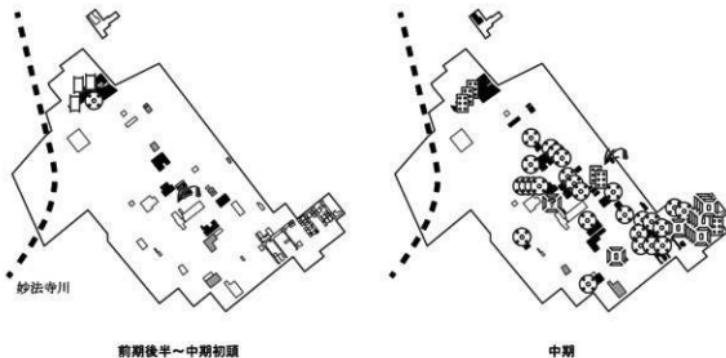
戎町遺跡における発掘調査は、今回の調査で 72 次となる。しかし、遺跡の全容解明については十分とはいえない。したがって、ここでは本遺跡において多数の遺構・遺物を得ている弥生時代前期後半～庄内式期の様相について、調査成果をまとめる。

**前期後半～中期初頭 戎町遺跡では縄文時代晩期の土器が確認されているものの、顕著な遺構の検出はない。**これは、縄文時代において、当遺跡まで海進が及び、弥生時代に表出したことによる。現在の須磨海岸から和田岬までにかけては砂嘴が発達し、その内湾は潟化していたことが指摘される（高橋 1989）。その後、砂嘴の範囲が推測されるに至るが（増田ほか 2014・増田編 2019）、これによると、高取山南麓は内湾の最奥部にあたり、この内湾において最も早くに土砂の堆積が進んだものと考えられる。おそらく、山側からの堆積が進む一方で、湿地帯が依然として残存するような状況下において、戎町遺跡の水田を営んだものと推測される。弥生時代前期後半～中期初頭においては、遺跡の中央～北側に遺構が点在するが、扇状地末端に当たる北側に堅穴建物と木棺墓が営まれる状況から、第6・14・15・19・24 調査地点の南側で、居住域・墓域（扇状地）と生産域（湿地）とがわかつたものと考えられる。また、この時期の主な居住域は現在の戎町遺跡の範囲より北側に存在していた可能性も考えられる。

第1次調査における水田検出のプラント・オパール量から、水田の生産期間は約 30 年とされ（古環境研究所 1989）、水田はさほど長期にわたって営まれなかつたものと考えられている。水田の範囲については、第1次調査では水路および取水口が未検出であるため、北西側へ進展すると推定される。隣接する第 17・59 次調査地点では、調査対象が上層までであったため確認できていないが、下層に残存する可能性が高い。しかし、少なくとも第3・4・72 次調査地までは及ばないことが確認されている。近年、大阪府東大阪市・八尾市の池島・福万寺遺跡における水田の変遷状況を検討した結果、洪水砂の堆積がみえ堆積環境が不安定となる弥生時代前期中葉～後葉と中期中葉の2時期において小規模な水田ブロックが散在することが指摘された（井上 2019・2020）。戎町遺跡においても水田および湿地堆積層の上層は砂質土およびシルト質土からなる洪水層に覆われており、池島・福万寺例を参照すると、第1次調査検出の水田ブロックは当初よりさほど大規模なものではなかつたものとも推測できる。また、洪水の発生によって土砂の堆積が進行したことが、水田經營を放棄した理由と考えられる。

**中期 中期初頭以降の洪水により土砂の堆積が進み、その結果安定的な基盤層を形成した**と考えられる。その具体的な時期は不明であるが、遺構の分布状況から第Ⅲ様式より前のことを推測される。中期は第Ⅱ様式から第Ⅳ様式の遺構・遺物が確認され、その分布は遺跡の西側を除いた広範囲に及ぶ。また、そのなかでも第Ⅲ様式に最も多くのものを確認している。前期に比べると、居住域と墓域が東南側に移り、具体的な様相は不明であるが生産域が東側に展開していた可能性がある。

堅穴建物の分布は、遺跡中央（第1・3・4・17・59・72 次）と南側（第 35・38・41・63・69 次）の2カ所に集中域がある。また、掘立柱建物は北側（第 15・19 次）と東側（第 39 次）で複数検出される。建物分布の違いは、遺跡空間内における何らかの配置を意図した可能性や、人々の微地形に左右された可能性もあるが、調査空白地帯も多いため、現状では不明である。周溝墓の一部は点在した状態で確認されたが、基本的に居住域と墓域は区別して営まれたといえる。周溝墓は、ほとんどが第Ⅲ様式のものであり、この前後における墓制については今後の調査成果が待たれるところである。



第 50 図 戎町遺跡の遺構分布状況図

**後期** 中期とは異なり、堅穴建物・掘立柱建物の検出は皆無となり、遺構自体の存在が極めて少ない。この時期の妙法寺川流域～旧茹藪川間においては、戎町遺跡の西～南側に立地する大手町遺跡、大田町遺跡、千歳遺跡、松野遺跡、若松町遺跡などで活動の痕跡がみえる。一方で上流側に遺跡は確認できない（前田 2001、阿部 2013）。このため、戎町遺跡に居住していた人々は、一時的に西もしくは南側へ移動した可能性もあるが、その要因は不明である。

**庄内式期** 第Ⅲ様式に次いで多くの遺構を確認しており、遺構は遺跡の北西から南東にかけて直線に分布する。堅穴建物は中央～南側にかけて3ヵ所に集中域をもつ（第3・72次、第22次、第31次）。この時期の墓域については不明である。妙法寺川流域～旧茹藪川間においては、後期から庄内式期まで継続する遺跡が多いなか、戎町遺跡では中期～庄内式期における遺構数がV字に変遷することは特筆すべき点といえる。これに関しては、周囲の遺跡の動態と合わせて考えていく必要があろう。

以上のように、戎町遺跡第72次調査に関わるいくつかの考察を試みた。以前行われた調査データの整理に終始した感は否めないが、今後本遺跡および周囲の遺跡での営みを考えていく上での一助となれば幸いである。

#### 参考文献

##### 【書・論文など】

- 阿部敬生 2013 「神戸市域における丘陵上集落について」『弥生研究の肖像』みづほ別冊 大和弥生文化の会  
井藤範子 1983 「近畿」『弥生土器第1』ニューサイエンス社  
井上智博 2019 「大阪平野における縄文時代後期から弥生時代前原の地形変化と遺跡動態」『日本考古学協会 2019年度岡山大会研究発表資料集』一般社団法人日本考古学協会  
井上智博 2020 「弥生時代水田の動態と地形変化・降水量変動」『弥生農耕－田んぼとはたけ－』大阪府立弥生文化博物館  
今村嘉雄・版本 稔編 2007 「弥生時代はいつから－年代研究の最新総一」国立歴史民俗博物館  
古墳環境研究所 1989 「ブランクトバール分析調査報告」『戎町遺跡 第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会  
小林謙一 2006 「土器村着底化物を用いた年代測定－試料採取と前処理－」『新弥生時代のはじまり 弥生時代の新年代』雄山閣  
権官 正 2007 「東播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年－播磨編－』大手前大学史学研究所  
高橋 学 1989 「戎町遺跡の地形変遷－鯉川・妙法寺川流域の地形変遷－」『戎町遺跡 第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会  
田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店  
千種 潤 2018 「六甲山西端域における地形の変遷と道路の立地」『構築と交流の文化史』工業普通先生卒業記念論集 雄山閣  
西本豊弘編 2006 『新弥生時代のはじまり 弥生時代の新年代』雄山閣  
前田佳久 2001 「大阪平野における弥生集落－神戸市域を中心に－」『みづほ』第35号 大和弥生文化の会  
増田富士雄・佐藤喜英・櫻井皆生・伊藤有加 2014 「神戸市古川町遺跡にみられる砂礫浜海岸の堆積物とその古地形上の位置」『古川町遺跡 第2次発掘調査報告書』神戸市教育委員会  
増田富士雄編 2019 「ダイナミック地層学－大阪平野・神戸六甲山麓・京都盆地の地積層の解析－」近未来社  
森岡秀人・竹村忠作 2000 「浜津地域」『古式土器解説の年代学』(財)大阪府文化財センター  
森田光行 1990 「浜津地域」『弥生土器の様式と編年－近畿地方II－』木耳社  
若林邦彦 2003 「近畿地方」『考古資料大観』弥生古墳時代土器1』小学館  
若林邦彦 2015 「近畿」『考古調査ハンドブック12 弥生土器』ニューサイエンス社
- 【発掘調査報告書】  
山田清朝編ほか 1997 「美乃利遺跡」兵庫県文化財報告第165号 兵庫県教育委員会  
福井美治編ほか 1982 「由能遺跡発掘調査報告書」尼崎市文化財調査報告第15集 尼崎市教育委員会

# 写 真 図 版





7区 SX08 出土炭化米および周辺の土器

カラー図版 2



高取山から調査地を望む（北西から）



7区 SP99・SX08 土器出土状況（北から）



1区 第2遺構面全景（北西から）



2・4区 第2遺構面全景（北東から）

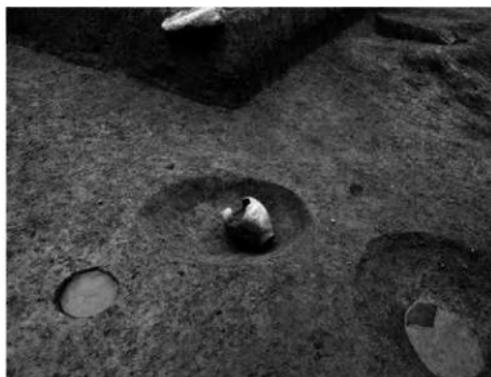
写真図版 2



4区 SB01 土器出土状況  
(南から)



4区 SB01 底面上土器出土状況  
(南から)



4区 SP11 土器出土状況  
(東から)



6区 第1遺構面全景（北から）



7区 第1遺構面全景（北西から）

写真図版 4



6区 第2遺構面全景（西から）



7区 第2遺構面全景（北西から）



6区 SB02-SK01 土器出土状況  
(北西から)



7区 SB03 全景  
(西から)

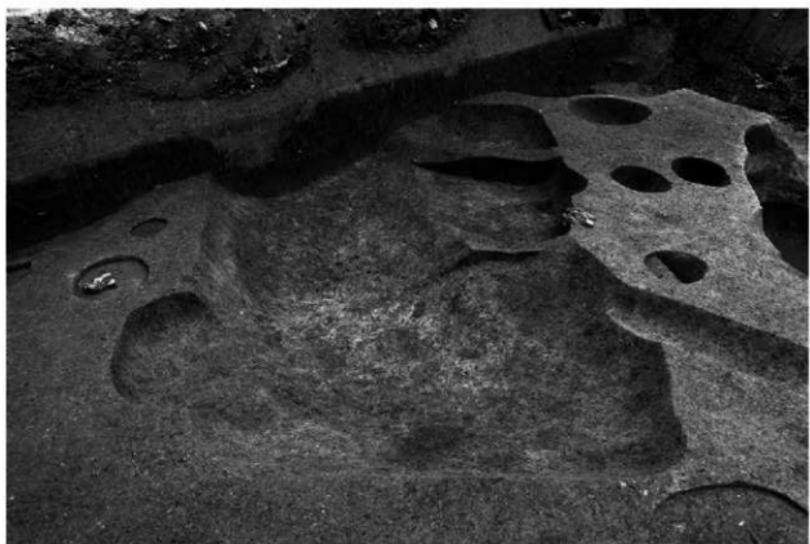


5・7区 SB04 全景  
(南東から)

写真図版 6



7区 SK02 全景（北西から）



7区 SK12・18 全景（北東から）



6区 SK05 全景（北東から）



5区 第2造横面全景（南東から）

写真図版 8



5区 SK20 土器出土状況（北東から）



7区 第4遺構面全景（南東から）



7区 SX08 土器出土状況  
(南西から)

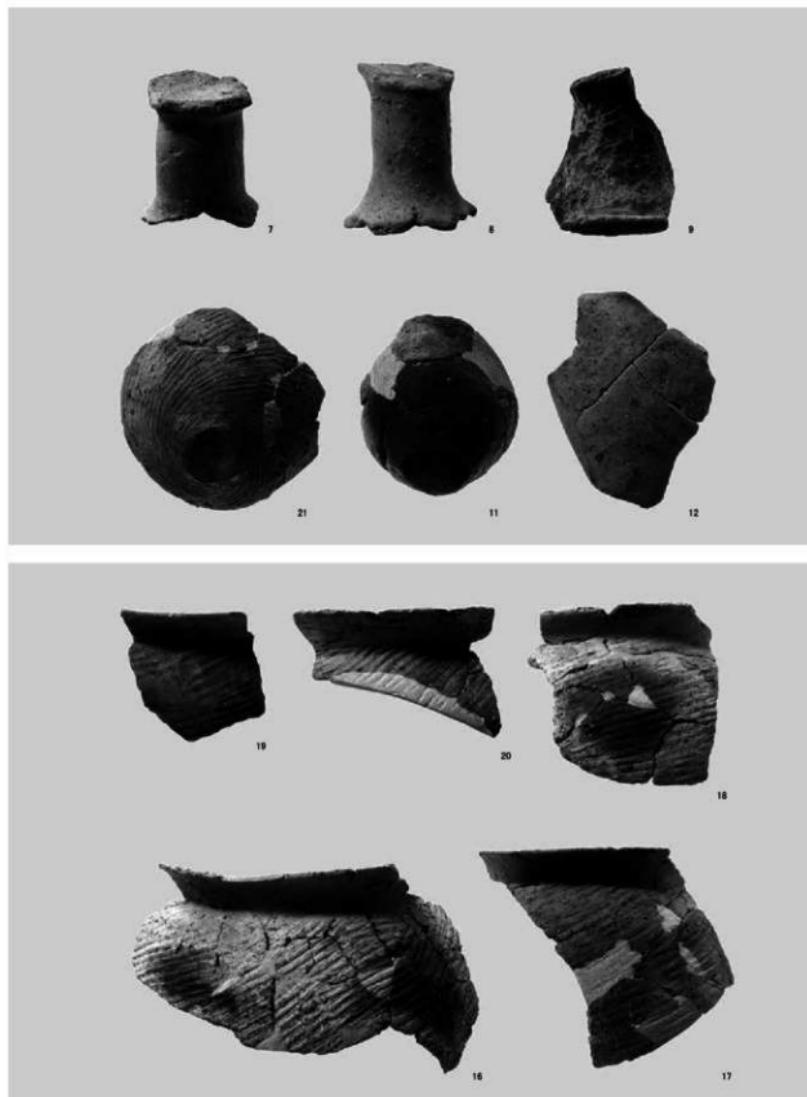


7区 SX08-2 全景  
(北西から)

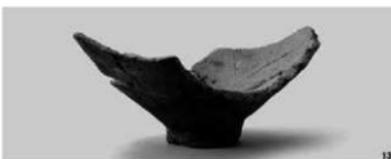
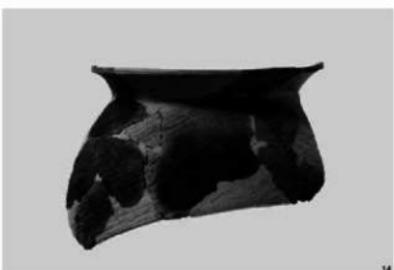


7区 SP105 土器出土状況  
(南西から)

写真図版 10



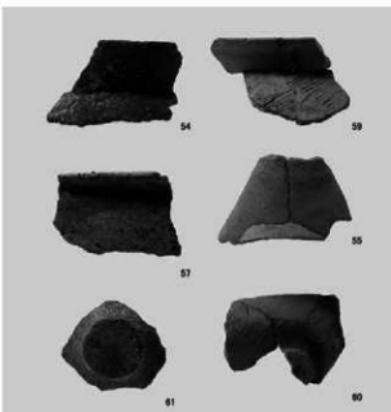
SB01 出土遺物 (1)



SB01 出土遺物（2）

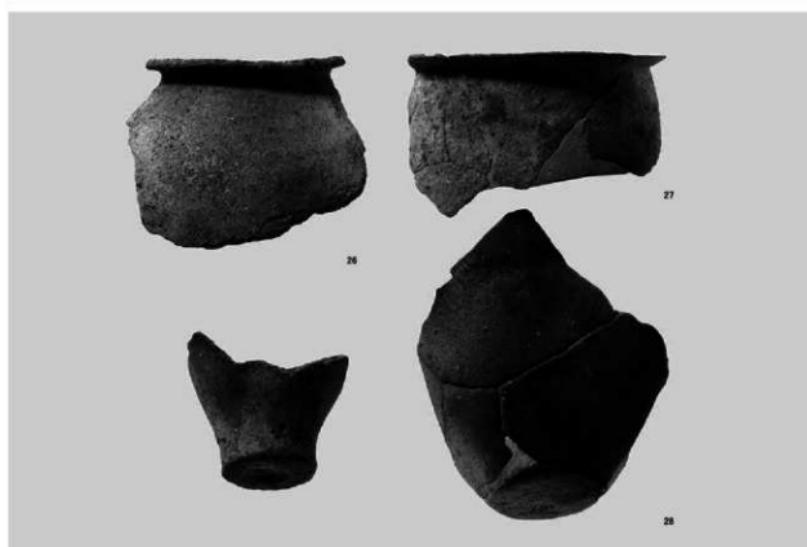
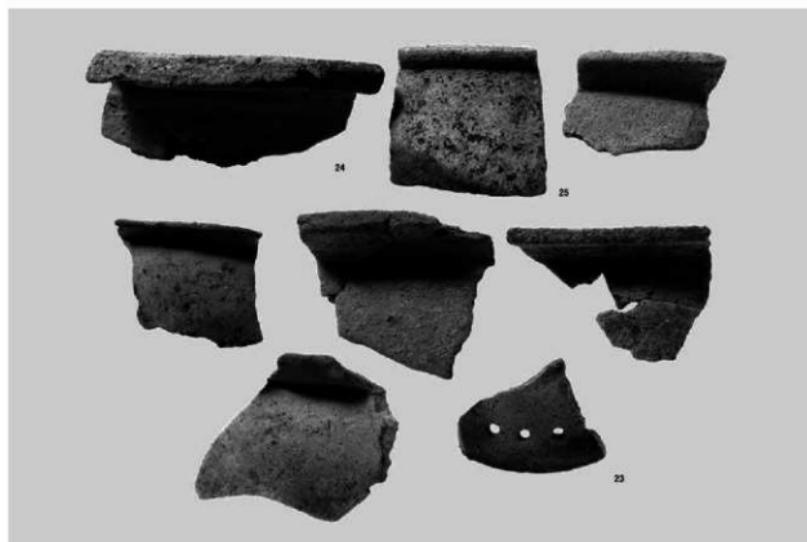


SP02 出土遺物



SK02 出土遺物

写真図版 12



SB02 出土遺物（1）



S802 出土遺物（2）

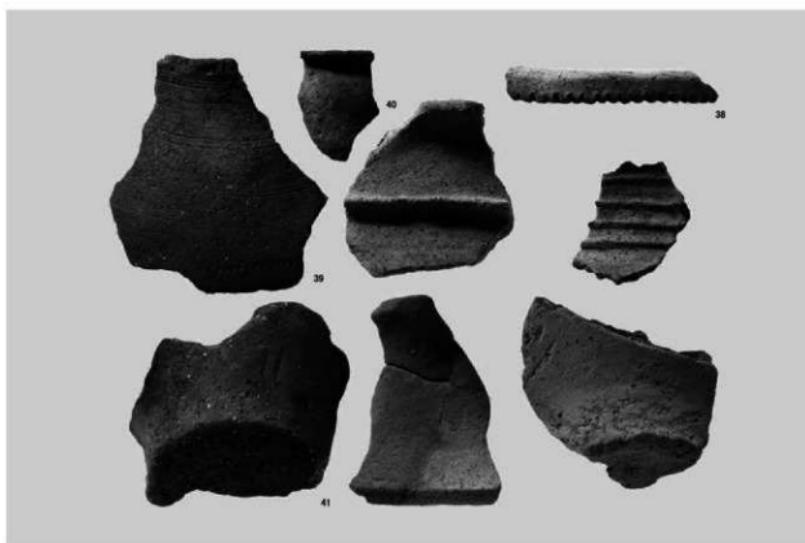


S803 出土遺物

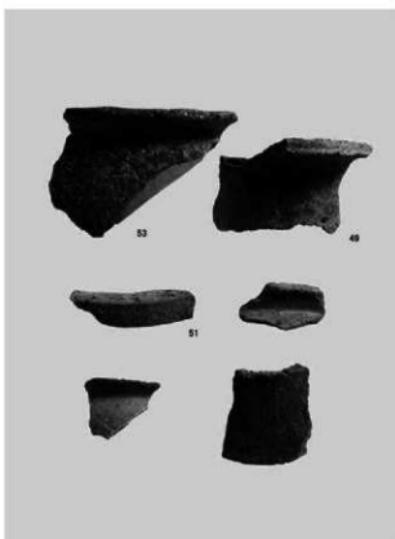
写真図版 14



SB04 出土遺物



SK02 出土遺物



SK12 出土遺物

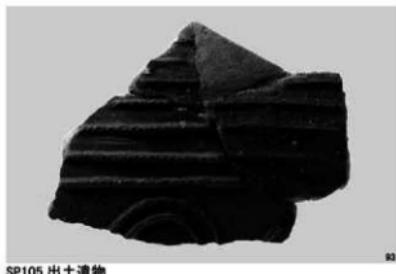


SK05 出土遺物

写真図版 16



SP73 出土遺物



SP105 出土遺物



SP11 出土遺物

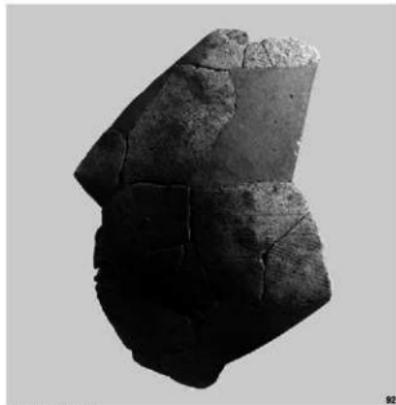


87

88

91

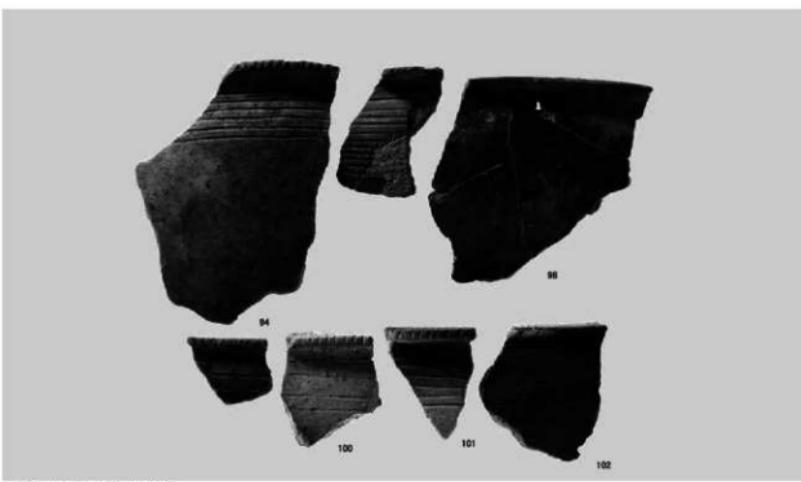
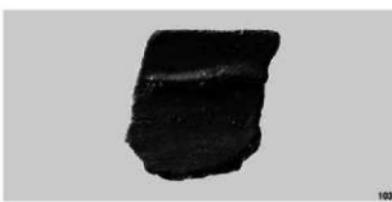
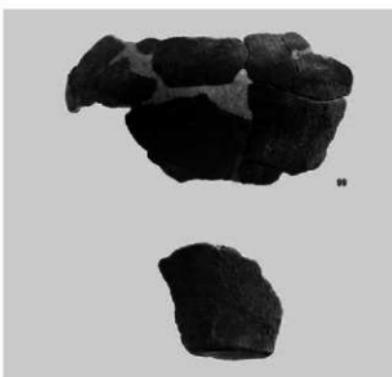
92



SP99 出土遺物

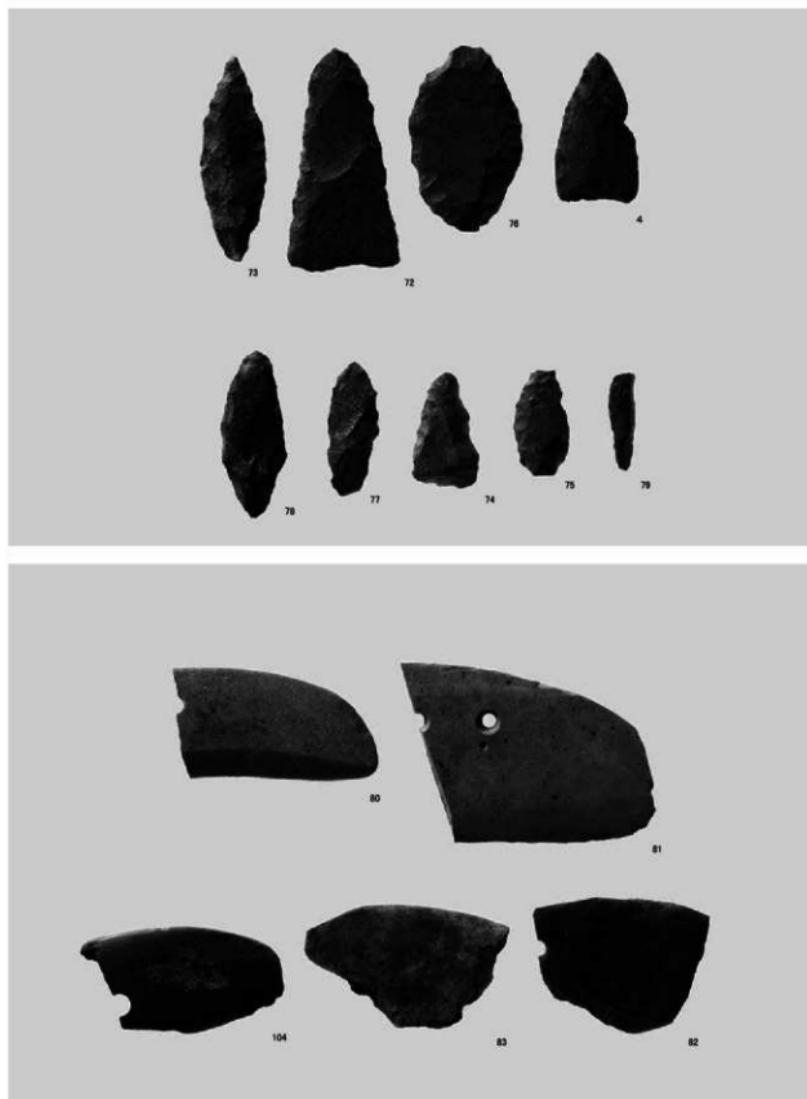


SX08 出土遺物

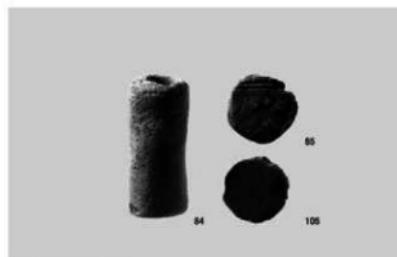


下層シルト質土層出土遺物

写真図版 18



調査地出土石器（1）



調査地出土石器（2）

5 調査地出土土製品

## 報告書抄録

|       |   |                    |                          |  |                        |                      |        |
|-------|---|--------------------|--------------------------|--|------------------------|----------------------|--------|
| ふりがな  | えびすちょういせき だい 72 じ はつくつちょうさほうこうしょ  |                    |                          |  |                        |                      |        |
| 書名    | 戎町遺跡第 72 次発掘調査報告書   |                    |                          |  |                        |                      |        |
| 副書名   |   |                    |                          |  |                        |                      |        |
| 編著者名  | 小野寺洋介(編) 藤井太郎 丸山真史 伊藤茂 佐藤正教 廣田正史 山形秀樹 Zaur Lomtadze 小林克也  |                    |                          |  |                        |                      |        |
| 編集機関  | 神戸市文化スポーツ局文化財課  |                    |                          |  |                        |                      |        |
| 所在地   | 〒 650-8570 神戸市中央区加納町 6 丁目5-1 Tel 078-322-5799 Fax 078-322-6148  |                    |                          |  |                        |                      |        |
| 発行年月日 | 2021 年3月 31 日   |                    |                          |  |                        |                      |        |
| 所収遺跡名 | 所在地   | コード<br>市町村<br>遺跡番号 | 北緯<br>東經                 | 調査期間   | 調査面積<br>m <sup>2</sup> | 調査原因                 |        |
| 戎町遺跡  | 神戸市須磨区戎町3丁目<br>7番5・6・12・13  | 28107<br>21        | 34 度<br>39 分<br>31 秒     | 135 度<br>8 分<br>7 秒                          | 20190525 ~ 20200814    | 212<br>(延べ<br>約 480) | 記録保存調査 |
|       | 種別  | 主な時代               | 主な遺構                     | 主な遺物   |                        | 特記事項                 |        |
|       | 集落跡   | 弥生時代               | 堅穴建物、溝、<br>土坑、ピット、<br>流路 | 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、<br>石礫、磨製石斧、石包丁、飯蛸壺、<br>土鍋 |                        | 炭化米出土                |        |
| 要約    | 戎町遺跡は、神戸市須磨区に所在する弥生時代～中世までの複合遺跡である。今回の調査では弥生時代中期初頭～庄内式期の集落跡を発見した。弥生時代中期の堅穴建物4棟、庄内式期の堅穴建物1棟など多数の遺構を検出した。 |                    |                          |  |                        |                      |        |

---

### 戎町遺跡第 72 次発掘調査報告書

2021.3.31

発行 神戸市文化スポーツ局文化財課

神戸市中央区加納町 6 丁目5番1号

Tel 078-322-5799 Fax 078-322-6148

印刷 株式会社クレアチオ

神戸市中央区新港町8-2 新港貿易会館4階 32

Tel 078-332-0515

神戸市広報印刷物登録 令和2年度 第 490-6 号 (広報印刷物規格 A-6 項)